
エア・バトル

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エア・バトル

【Nコード】

N9866C

【作者名】

イヌズキノネコ

【あらすじ】

精神病に陥る人が増えている現代社会。その中でもうつ病患者は急速に数を伸ばしてきている。奏文哉もその一人だった。3年前に発病し治りはしたものの、その後遺症として対人関係に苦しんでいた。他人との関わり合いを拒み続けてきた彼には、通常の人間にはもたえない能力が生まれた。ある夜、彼は同じ能力を持つ者が集うゲームに参加する。彼の物語はルールを外れ、新たな世界へのトンネルをくぐりだした。

〈序章〉（前書き）

《はじめに》

『エア・バトル』に興味を持って頂きまして、誠にありがとうございます。

本作品には色々な人物や場所などが出てきますが、すべて架空の事柄です。現実には存在するモノとは切り離して、お考え下さい。

また、本作品には残酷な描写が出てくる部分があります。そういった表現が苦手である方は、あらかじめ了承して頂いた上で読まれる事をお勧めいたします。

それでは、『エア・バトル』の開幕です。

皆様とは長いお付き合いになるとと思いますが、どうぞ最後までお楽しみにいられて下さい。

筆者：イヌズキノネコ より

《序章》

人間は自分の領域を持つて生きている。

それは自分の考えや思想といったものであり、自分と周囲との間にある一定の距離だったりする。

例えるなら、ベンチに座るとき、初めから誰かが座っていたとしたら、その人との間を開けて座ってしまう。実際に会ったことはないので、テレビで流される言動や行動だけで、その人を好きになったり嫌いになったりする。

どんな相手だろうと、人は自分の領域を崩さないように生きている。

自分という者を保持する力が、人間には無意識に働いてしまうのだ。

もしも領域を侵してくるモノがあるとすれば、それに対して拒絶する力が働く。それでも侵されてしまった場合、人間の心には目に見えない傷ができる。できた傷は治すのに時間がかかり、それまでの間無意識に働く力はより強力なものへと変わっていく。

私の場合もこのケースだった。

自分を保持する力のせいで、他人との関り合いを遠ざけてきた。そのため、極度の対人恐怖症となっている。

最近他人との交流があったとすれば、ドア越しに話しかけられた

くらい。それも半年前のような気がする。そういったこと以外は、面と向かって他人と話をすることも体が触れ合う事も一切ない。部屋の中で、ただ閉じこもっているだけ。

こんな状態になって6年が経つ。

どうしてこんな風になってしまったのだろうか……。

1・奏の日常

現在時刻は深夜2時。

私の住んでいるアパートの周囲は寝静まっていて、街灯がチカチカと音を立てている以外何の音もしない。虚しく鳴り響く音色に紛れて、お腹を空かせた私は玄関の扉を開けた。

扉の向こう側から流れて来る寒気。私の肌を突き刺すような凍てついた風。外気は肌を通り越して、心の中にまで冷たさを運ぶ。伝わってくる針のような痛みは、今が冬である事を直に訴えていた。

外に出た私は、口から白い息を吐き出した。白色の空気は身体から温もりを奪って、夜空の向こうへと逃げていく。

「マジで寒い……」

視界には暗闇に明かりを灯した街灯が2つほど……。何という殺風景な姿だろう。ただでさえ震えている身体が、回数を増して震えだした。

おんぼろアパートの2階に位置する私の部屋。周辺には田畑が広がっており、そんな中に立っているこのアパートは明らかに孤立した存在である。そこに居を構えている私は夜の闇に身を隠して、今コンビニへ向かおうとしていた。

ここから徒歩15分。そこに目的の場所がある。田舎の光景にはちよつと不釣り合いな24時間営業のお店。私にとってその場所は、必要不可欠な存在だ。だが、そこへ行くまでにはちよつとした問題がある。それは、ある場所を必ず通らなければならないということ。このアパートの住人ならば、“決して通ってはならない”と口にするような場所を。そんな危険な場所を今から通らないといけないのだ。

歩き始めた私の前に、その場所は堂々と姿を現した。

前方に見える1階への階段——そう、この階段こそが“決して通ってはならない”場所だ。

アパート自体古い建築物である。そのため、建築当初から存在するこの階段は建物本体よりも危ない状態になっている。錆びつきの目立つ階段には所々穴が開いて……いや、穴という表現は不適切かもしれない。なぜなら一段の半分以上が無くなっており、通れるスペースよりも通れないスペースの方が広いのだから。足元が危ない階段の手すりかというと、もちろん既に崩壊している。耐震強度なんてモノは無いも当然。そのうち風化してしまうのでは？……もちろん冗談だが、見た目はそんな感じだ。

命をかけて通るような所ではないが、私はそれくらいの覚悟で一步を踏み出した。持ち上げられた足はゆっくりと階段に近づいていく。足の裏が錆びついた鉄板に触れると、靴と鉄板の間で音が生まれた。それを合図に体重を鉄板の上へ。重心の半分、つまり体重の半分か置かれても、階段に崩れる様子は見られなかった。

一段目の安全が確保された階段に、もう一つの足をのせていく。赤褐色の鉄板は甲高い音を立てながら、私の身体を受け止めた。すべての体重を背負っても、錆びついた階段は崩れない。一瞬心に余裕ができたが、安心するにはまだ早いと再度気を引き締めて、私は次の段へと踏み出した。

そんな肝を冷やす格闘を5分間続けて、私は1階に辿り着いた。

難関をクリアして楽になった心。コンビニへ行くだけなのに、なんて大袈裟なんだろう。早くこの家から別のところに行きたいのだが、生憎あいにくこの物件よりも良い所なんて無いだろう。何といってもタダなんだから……。お金を節約して暮らしていかなければならない私にとって、これ以上の場所はなかった。

コンビニへ着くと、2週間分の食料を買い込んだ。

「2980円です」

店員が掲示した金額に、私は3000円を差し出す。3枚のお札は店員の手元にはいかず、カウンターテーブルの一番手前に置かれた。

そのお金を店員は、腕を伸ばして拾う。顔から“なんでこんなところにお金を置くんか”というボヤキが聞こえてきた。

「20円のお釣ります」

店員の声が響く。

「あ、募金箱に入れておいてください」

それに対して、私はいつものようにお釣りを拒否した。

節約しなければならない生活なのに、お釣りを断るのは辛い。でも、受け取るわけにはいかなかった。

なぜなら、私は近づく者に対して無差別に傷つけてしまうから…

…。

2・運命のいたづら

コンビニのドアを開けて外に出ようとした時、バイク2台と車1台が轟音を響かせながら、駐車場に入ってきた。車はいろいろな改造を施してあるワゴン車で、ピンクがかった紫の光が車内を照らしている。2台のバイクもまた改造が施しており、暴走族が乗っているようなバイクとは違うが、これはこれで相手を威嚇するような造りをしていた。

危険な香りを漂わせるバイク。それに乗っているのは2人の男。1人は革製のジャンパーに、もう1人は刺繍入りのジャンパーに身を包んでいて、その体は服の上からでもガタイの良さが窺えるほど鍛えられていた。

コンビニの入口で立ち止まっている私は、目の前の光景に茫然としていた。脳裏を過ぎる不吉なイメージに、思考を停止させられていた。

——記憶の奥で封をしたはずのモノが蘇ってくる——

私はドアに手をかけた状態のまま、これから起こるかもしれない最悪の事態を予感した。

バイクを停車させた2人の男はエンジンを切ると、車体から軽やかに降り立った。刺繍入りのジャンパーを纏う男は、風に煽られて逆立った金色の髪を、両手を使って元の髪型へと直している。革ジャンを纏う男は首を横に振って長い黒髪を揺らし、最後に手ぐしを

入れて冷気で固められた髪を解ほくしていた。

「ん？」

革ジャンの男と視線がぶつかる。ゴツイ体格の男が発する鋭い眼光に、私はなかなか目を背けることができない。男の眉毛は徐々に釣り上がっていき、表情はおっかない方向へと変化していく。その動向をじっと見つめる私の中で、恐怖が顔を見せ始めた。

男が一步を踏みだした時、私はようやく視線を逸らすことが出来た。押しあけていたドアから手を放し、顔を隠すように俯く。だが、身体には強い視線が張り付いており、状況はまだ改善されていなかった。

ここに居ては、まずい……。

そう思っても、立ち尽したままで動こうとしない体。まるで蛇に睨まれた蛙のように、私は動きを失っていた。

時計の針が止まっている私とは対称的に、男の足音は徐々に近づいている。私は動かない身体に指令を出して、必死に逃げようとしていた。硬くなった筋肉を無理やり動かして、膝を折り曲げながら右足を上げる。時間の流れが遅くなったかのように、右足はゆっくりと前に出された。

私がモタモタしている間に、ワゴン車から3人の男が出てくる。

早く、早く……と焦る心。

それとは裏腹に動くのろまな体。

迫り来る接触へのカウントダウンの中、私の精神こころはすり削られていた。

ロクに動きもしない体であつたが、なんとかコンビニの出入りに邪魔にならない位置まで来る事が出来た。

男たちは私に見向きもせず、コンビニへと入っていく……ただ1人を除いて。

依然睨みをきたして近づいてくる革ジャン。男は私の顔を覗き込むようにして、私の顔のすぐ傍まで近寄っていた。

もうダメか……。

「おい、マサ！ 何してるんだ？ 早く入るぞ」

「ああ……」

息がかかるくらいまで近寄っていた男は体を反転させて、コンビニの方へと身体を向けた。そして、何もなかったかのように仲間の元へ歩いていった。

男の視線から解き放たれると、強張^{いっかば}った体から力が抜けていく。

……助かったあ。

ホツと胸を撫で下ろして、いつもよりも敏感になっていた身体を元の状態に戻す。疲れきった身体に辺りを吹きまわっている風が優しく接してきて、熱くなった身体を癒してくれた。

自由となった私はフウ〜と溜息を一つついて、止まっていた体を再起動させた。

コンビニへ買い物に來ただけなのに、こうも疲れるなんて思ってもみなかった。後は家に帰るだけ……これ以上の面倒事はもう懲り懲りだ。

この後も何が起るかなんてわからない。細心の注意を払って、行動しよう！

そう思った矢先だった。

「おい！」

低いドスの利いた声に、足が止まる。離れようとする身体を残して、首から上の部分が声のする方へと回転した。

「おまえ……俺に会ったことないか？」

さっきまで私を睨んでいた男がコンビニへ入る一歩手前で踏み止まって、こっちを見ている。睨みつける眼とは別の疑いの眼をした長髪の男。油断していた私は不意を突かれて、頭の中が真っ白になった。

心臓の打ち出す音がやけに大きく聞こえる。ドクン、ドクンと大きな唸りを上げる血管が体中を這いずりまわり、動力となるエネルギーを存分に支給している。私はこっちを見つめる男に対して、首を横に振って応えた。しかし、男の表情が変わることはなかった。私に向けられている疑いの視線。男の瞳には私の姿だけが映し出され、何かを思い出すように顔はしかめられている。

頼むから……逃がしてくれ。

心の叫びが頭の中いっぱいに広がる。体を流れる生命の波音がボリュームを上げる。何とも言えない息苦しさは胸を締め付け、私は歯を食いしばってそれに耐えた。

「……あつ！」

男の目が大きく開いていく。何かを思い出したような表情を浮か

べている。

何かを思い出した男は表情を変えると、身体を翻してコンビニへと駆け出した。そしてコンビニのドアを開けて、仲間たちに向かって大きな声を上げた。

「ヒロ！ あいつだ！ 一年前におまえを怪我させたやつがいる」
突然声を荒げる男に、仲間たちは一瞬困惑の色を示した。だが、言っている意味を理解するとすぐに顔を強張らせて、すごい速さでこっちに向かってきた。

……もう逃げられない。

私は確信した。

奴らは私を知っている。もちろん私も奴らを知っている。

一年前のある日、私と奴らは偶然出会った。

それは、記憶から抹消したい出来事。しかし、抹消する事は叶わなかった。それならば、と嚴重に封をした……なのに――

運命は……残酷だ。無理やり過去を掘り返してきた。

3・一年前の出来事 I

2007年11月23日。

当時、私こと奏 文哉（カナデ フミヤ）は精神的な病気から立ち直ったばかりだった。病気が治ったといっても、医者に判断されたわけではない。私は病院に通ってなどいなかったから……。

最近、“脳の働きが正常になってきた”と思うようになったので、病気が治ったと判断した。少し前の私は、死ぬことを恐れもしない生存意識の欠けた人間であった。

手首を切ったらどうなるか？

ベランダから飛んだらどうなるか？

そんな馬鹿げた事を普通に考えていた。考えていただけならまだ良いが、実際に行動へ踏み切ろうとした事もある。直前で思いとどまる事が出来たが、冷静に考えるとかなり危ない状態だった。

今は気持ちも前向きになり、物事に対する判断も正常。まあ、他に幾つか問題を抱えていたけど……。

勤めていた会社をクビになり、収入の見込めない生活。

ほとんど部屋の中で生活をしていたために、他人との接し方を忘れてしまっている事。

外に出ないという事は身体を動かす機会もなかったわけで、運動不足によって引き起こされる体の不調。

その他にも、色々と悩みがあった。22歳という若者にとっては、深刻な問題である。

ひとまず、死なずに済むような生活を送る事だけ考えた。通帳に

はこの先10年は暮らしていけるだけのお金があり、食料さえ調達できれば何とか生きていける。いろいろな問題を抱えている私にとって、これが唯一の救いだった。後は仕事を見つけて、収入を得る事が出来さえすれば問題はない。

「よし！」

考えが一段落したところで、急にお腹がすいてきた。時計を見ると、もうお昼をとくに過ぎている。

「せっかくだから、外出するか……」

今までは夜に活動するばかりで、太陽が昇っている時間帯に外へ出る事などほとんどなかった。夜であれば誰かと会う確率は低いし、服装を気にする必要もない。余計な事に頭を使わなくて済むという安易な理由から夜中に歩くようになっていた。

でも、今は真っ昼間。誰に見られても恥ずかしくないようにしないと。

私はタンスを開けながら、部屋着を一枚一枚脱いでいく。タンスの中で眠っていた服たちが久しぶりに外の空気を吸い、そして吐き出される空気は昔じいちゃんの家で嗅いだような匂いがした。

服装をどうするか結構悩んだが、今日はこげ茶色のパンツに黄色い文字を可愛く並べた白地のロングTシャツ、その上から黒にも見える濃い紫色をしたジャケットを羽織った。

「——それじゃあ、行ってきます」

誰もいない部屋に言葉をかけ、ドアに鍵をかける。頑丈な扉は力チャという音を立てて、主のいない家の口を締めた。

この頃の私は、結構いい値段のするマンションで暮らしていた。

マンションの間取りは、というと――玄関から一本の廊下が伸びており、その先にキッチンとリビングがある。キッチンとリビングには敷居が設けられていて、調理してもリビングに匂いが漂う事はほとんどない。リビングはベッド、テレビ、机、本棚、テーブルを置いても、悠々と過ごすことができる広さを持っている。バス・トイレはセパレート式で、廊下から各部屋につながっていた。資料では1Kとなっていて、家賃6万とこの地域にしてはなかなかの金額だ。この部屋で引きこもり生活を送っていたなんて……何とも勿体ない話である。

私は5階に住んでおり、エレベータを使って1階へと降りた。マンションの玄関にはカードキーの差し込み口があり、防犯用のセキュリティがしっかり機能していた。

玄関にゆっくり近づいていくとセンサーが気配を察知して、主人の命令も無しに閉ざっていた扉を左右に動かしていく。私は外へと通じる門を潜り抜けて、久しぶりの地上へと足を踏み出した。

「――うつ!？」

降り注がれる光のシャワー。全身を満遍なく包み込んで、日常の舞台へ戻る私を歓迎している。薄らと開けた瞼の向こうには、目が眩むほど明るい世界が広がっていた。

青く澄んだ空に、悠々と浮かんでいる雲。

アスファルトの道に並んでいるイチョウの木々。

犬の散歩をしている人に、仕事で走らせられている車。

そして、すべての物を包む陽の光。

久しぶりに温もりの感じられる光景が……私の望む光景が、目の前にはあった。その光景を眺めていると、心が温かくなっていくよ

うな気がした。

心が温もりに満たされたところで、私は繁華街へ続く道を歩み始めた。

平日の午後。主婦やサラリーマン、学生などで湧きかえっている大通り。通りゆく人の数は休日より少ないものの、人との接触を極力避けてきた私にとってはかなり多く感じる。陽気な人の群れはとても新鮮で、長い間暗闇に閉じこもっていた私をまるで誘っているようである。

私は躊躇している足を動かして、通りの中へと入っていく。

「くっ……！」

人集りへ近づくと、胸の奥を締め付けるような痛みが走った。意識しないところで身体が、この場所を拒否しているみたいだ。

更に歩みを進めていくと、痛みが強さを増して襲ってきた。

「やっぱり、抵抗があるのかな……」

いきなりハードルの高い場所を選んでしまったらしい。体を蝕む魔の手は胸から腹部へとその範囲を拡大させている。嘔吐を催し出した身体に、私は“無理をするのは良くない”と判断した。

足を止めて、後ろへと振り返る。繁華街に背を向けた私は、人気の少ない場所へ移動を始めた。

繁華街から少し離れたところに、昔ながらのお店が並ぶ旧商店街みたいな場所がある。その商店街通りは、以前私がよく訪れていた場所だった。まだ健全な身体であった頃、懐かしい匂いのするこの場所は、私のいこいの場として度々利用させてもらった。その都度、傷ついた心身を癒してもらい、大変お世話になった場所である。

その中に私がよく通っていたそば屋がある――そば屋《信玄》。

素朴な味わいと腰のある麺が売りで、私の好みにマッチするお店だ。「いらっしやいませ。お一人様ですか？」

「はい」

「それでは、あちらの空いている席へどうぞ」

お店の戸を開けると、着物姿のお姉さんが私を迎えてくれた。着物に包まれたポツチャリとした体形と、可愛らしい顔が作る笑顔が魅力的な女性だ。

彼女の案内により、店の奥から2つ目にあたる個室へと移動する。席に腰をおろした私は、一息つきながら辺りを見渡した。

畳を敷き詰めた客間。

天井から吊り下げられた囲炉裏。

壁に掲げられた掛け軸。

木目を残したテーブル。

この店は和の造りで統一されていて、日本人にしかわからない懐かしい雰囲気心が落ち着かせてくれる。

「どうぞ」

先ほどの女性がそつとお冷を差し出す。

「ご注文はお決まりですか？」

「天そばをひとつ」

「かしこまりました」

彼女はお辞儀をして、店の奥へと消えていった。

お冷を出され、注文を聞かれ、それに答える。誰もが行っている一連の動作。だが、今の私には久しぶりの会話であり、注文に答えるだけなのになぜか緊張してしまった。正直キチンと返事出来た事に安心している。

「これじゃあ、リハビリだな……」

私はお冷を口に運びながら、自分の置かれている状況を再認識した。

しばらくして商品が届いた。薄口しょうゆ味のつゆにヨモギ色の麺が沈み、豪快に揚げられた海老が彩りを添えている。どんぶりから流れ出る湯気は、私の胃をむやみに刺激して、身体は無情にも目の前の食料に踊らされていた。

「いただきます」

合図があるのを待っていたかのように、右手が箸を掴む。それほど同時に、左手はどんぶりを持ち上げた。スムーズに動く両手から連鎖して、私の口は自然と開く。口へと運ばれる艶のある麺は、抵抗する事なく私の体内へと入り込んでいった。

口の中に広がるほのかな醤油の甘み。

ツルつとのどを通る麺。

サクツとした食感の後プチツと身がはじける海老天。

食が奏でるハーモニーに、ひとときの安らぎを感じた。

食事を済ませた私は、お茶で食後の時間を満喫した。お茶を飲み終ると、重くなった身体をゆっくりと起こした。

膨れたお腹を抱えながら、店の出入り口にあるレジへ向かう。レジの近くまで来た時、接客をしてくれたあの子が会計をしに走ってきた。

「天そばお一つで750円になります」

台を挟んだ向こう側で、彼女が愛嬌あいきょうのある表情を浮かべている。

私は財布を取り出して、千円札を台の上に置いた。

「1000円お預かりします。……250円のお返しです」

彼女は声に出しながら、私にお釣りを返す。

広げた私の右手に、彼女のお釣りを持った右手が置かれる。そして、丸い形をした金属が私に触れ、それを包み込むように手を閉じる。

何万回も行ってきた行動。……しかし、いつもなら手の上に来るはずの金属の感触、それが——来ない。

どうしたのだろうか？

疑問が浮かんできた瞬間。

「——きゃ」

悲鳴と共に、金属が地面に落ちる音が聞こえてきた。見ると、彼女は釣りを持っていた方の腕を天井へ高々と伸ばしている。パールの形をした手からは、先程まで握られていたお金が姿を消していた。

何をしてるんだ？

当然の疑問が浮かび上がる。しかし、彼女もまた“何が起きたの？”といった表情を浮かべている。

「あ、すみません」

お釣りを落としたことを思い出した彼女は、身を屈めてお金を拾い始めた。

状況の掴めない私は、お金を探す彼女の姿をただ茫然と見つめていた。

お釣りを拾い終わった彼女は姿勢を正して、私の方へと向き直す。

「本当に申し訳ありませんでした」

「いえ……。それよりも大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。あ、お釣りの250円です」

笑顔を取り戻している彼女から再度お釣りを受け取る。彼女の手が私の手のひらに向かって、ゆっくり……ゆっくり……と降りていく。

彼女の指先が私の手と触れ合う——その瞬間、私は不思議な現象を目撃した。それは今まで目にした事のない、奇怪な光景だった。

手と手が重なるうとする直前、何かに弾かれたみたいに彼女の手が私から離れていく。まるで小さな爆発が起きたかのような突発的な出来事。腕ごと吹き飛ばされた彼女は体を後退させながら、さつきと同じポーズをとる。手から零れ落ちていく3枚の硬貨。硬貨はそのまま手をすり抜けて落下していき、音を立てて地面に激突した。

何が起きたのかわからないが、手と手が合わさろうとした時に何かの現象が起きている。瞬時の事で詳細は確認できていないが、起こった出来事は現実である。

「す、すみません！」

彼女は放心状態の私に一言謝罪を述べて、手をさすりながら落ちたお釣りを拾い出す。

私が……何かをしたのか？

自分の右手を見つめながら、私は目の前で起きた事の原因を探った。

「二度もお釣りを落としてしまい、本当にすみませんでした」

手のひらに向けていた視線を彼女の方へ向ける。申し訳なさそうな顔をしながらも、私が何かしたのではないかと疑っている女性の姿が目映った。

「250円……です」

恐る恐る、彼女は台の上にお釣りを置いた。彼女が手を引いたのを確認して、お釣りにそつと手を伸ばす。

手の内に感じる金属の感触。私はしっかりとお釣りを握りしめている。

お釣りを受け取った私は、彼女の顔を見ないようにして、妙な空気がなった店内から逃げるように外へと飛び出した。

昼過ぎの商店街通りに、私ひとりが佇んでいる。

「さっきのはいったい何だったんだ……」

もう一度右手を確認する。見た感じ、おかしいところはない。手を閉じたり、開いたりしてみる。……やっぱりおかしいところはない。

何とも言えない気分のまま、私は家路に向かって歩き始めた。

人気のない道を私と影が並走して行く。周りに他人はおらず、私を見ているのは空に昇っている太陽と雲、そして私の姿を写すガラスのみ。ガラスは、疎^{まは}らに伸びた長い髪と細みの体形をした男の姿を映し出している。身長は日本人男子の平均より少し高めで、骨格はガツシリとしているものの、筋肉が落ちた体からはひ弱なイメージしか受け取れない。男の見せている浮かない表情が、更に弱々しいオーラを漂わせていた。

悪い方へ考えてはいけない。

首を振ってさっきの事を頭の中から追い出す。そして、自分を奮起させるように立ち止まっていた足を動かした。

落ち葉に埋もれた道をかき分けながら、足音と北風が人気のない通りを進んでいった。

4・一年前の出来事 I I

あれから、2日が経過した。私は依然落ち着かない気持ちを抱えている。

自分の身に何が起きているのか？

昨日も同じような出来事が起きた。

お釣りをもらう瞬間、相手の手と私の手が触れ合う事なく離される現象。さすがに二度同じことが起きると、私に問題がある事に気付く。だが、どうしてこういう事が起きているのか……それは、わからないままだ。

解決しようにも原因がわからないのでは、太刀打ちできない。そうなると、問題を起こさないように注意するしかなくなる。つまり、人と接することを避けざるを得なくなったのだ。結果として、私は日中に外出することを止めた。

今はちょうど午前零時。この時間ならば人の足もほとんどないだろう。食料のない部屋で1日を過ごしていたため、空腹も限界を超え、腹痛に似た痛みを伴いだした。

よし、行こう！

心の中でつぶやいた言葉を行動へと移した。

玄関を出て、エレベータに乗り、1階へと移動する。エレベータの密室で“誰かが乗ってきたらどうしようか？”と不安な気持ちを掲げながら、私は到着する時を今か今かと待っていた。

一階へ降り立ったエレベータが到着の合図を鳴らす。ドアが開く

と、何も考えず早足で自動ドアをくぐり抜け、闇の中へと飛び出した。路上に出た私は、誰かと会う事のないように街灯のない路地裏へと入った。光のない通りでは目は役に立たず、ここを通った時の記憶だけが頼りとなる。ちょっとした段差やポリバケツ等いくつか障害はあったものの、目立つほどの外傷を負う事なく、目的の場所まで辿り着く事が出来た。

闇の中で異色の光を放つ24時間営業の看板。いくつものチェーン店を各地に出しているお店。家の近くにあるそのお店は、今の私にとっては非常に有難い場所だ。

店に近づいていく私は、途中で足を止めた。

店先に数人の若者が屯^{たむろ}しているのが見える。髪型、髪の色、服装はバラバラだが、彼らには一つ共通して言えることがある。……彼らは不良^{ヤンキー}だ。見るからに性質^{たち}の悪そうな、社会の輪から逸脱した者たちだ。

関わる事を恐れる私は、危険な匂いに包まれたその場所を避けるようにして、店内へと入った。

出入り口に設置された買い物カゴを手に取り、店内を歩く。生活用品のコーナー、書物のコーナー、飲料品のコーナーを順に回り、目的の食品のコーナーに辿り着いた。

真っ先に手にしたのはインスタント系の食品。これから外出を避けるようになれば、賞味期限の長いものが必要となる。数も多めに購入するつもりだから、あまり重い物を選ぶことができない。そうになると、インスタント食品が最適だと考えた。

目に留まる商品を片端から入れていく。飽きずに食べるにはいろいろな種類が必要だと思って、出来るだけ味が偏らないように選んでいった。最終的に選んだ商品は、カップ麺12種類にパン3種類、飲み物として1リットルのお茶を3本。

だいたい2500円くらいかな？

大まかな予想を立てて、財布の中を覗き込んだ。

「あ……」

財布に入っているお金は千円札1枚と小銭が数枚。

……足りない。

私は店内を見渡した。

書物コーナーの端に銀行ATMがある。ATMの取扱銀行名の欄には、自分が利用している銀行がちゃんと書いてあった。

商品を減らすべきなのか、お金を下ろすべきなのか、二つの意見を天秤にかける。ちよつとだけ考えてみたが、いつかは下ろさないといけないのだから……と思い、カゴを提げたままATMへ向かった。

カードを差し込み、画面の掲示に従ってお金を下す。何回も下したりするのは面倒くさいので、一気に五万円下ろすことにした。処理を終えて出てきたお札を手に取り、一枚一枚確認する。

1枚…… 2枚…… 3枚…… 4枚…… 5枚。

5人の無表情な諭吉が、左手にしっかりと握られている。機械に誤動作はなかったようだ。

空いている右手を器用に動かして、財布の口を開ける。口を大きく開けた財布の中へ、しわが寄らないようにお札を入れていく。諭吉がその顔を財布に銜^{くわ}えられた時、体に突き刺さるような視線を感じた。

私はお金を隠すように、お札を強引に財布の中へと押し込む。財

布をポケットにしまった後、辺りを見渡した。

お店のカウンターで暇そうな顔をしている店員。
店先で談笑している若者たち。

誰かがこっちを見ている様子はない。

思い過ごししかあ……。

最近色々な事があって、敏感になりすぎているせい、だな。

私はホッと胸を撫で下ろして、買い物カゴを掲げてレジへと向かった。

胸を撫で下ろしたのは良いが、ここからがまた問題である。レジでのやり取りは、今や最大の難所となっている。全身に余計な力が入って、顔を引き攣らせているのが自分でもわかる。ぎこちない動きをしながらも、私はカゴを台の上に置いて会計に入った。

バーコードを読まれていく商品たち。カゴの中から次々に取り出されては、赤い光の餌食になっていく。数が減っていく毎に、心臓を叩く音が大きくなる。胸を突き破ろうとする衝撃が、私の呼吸を妨げる。不安定な息継ぎと不安定な精神が、私の身体に苦痛以上の苦しみをもたらしていた。

最後の一つが読み込まれて、値段が掲示された。

「2835円です」

痺れ始めた手を懸命に動かして、ポケットの中へ突っ込む。鈍った感覚の中で財布を取り出し、その中から一万円札を摘み上げる。摘まれて出てきた一万円札は、カウンターの一番手前に置かれた。

店員は何食わぬ顔でお札を拾い上げる。同じく何食わぬ顔をした諭吉は、レジの中で何人もの漱石へと変換された。

「7165円のお返しです」

差し出されるお札に戸惑う私。このまま受け取ってしまったら、また同じようなことになりかねない。同じ轍^{こつ}を踏むのは、これ以上ごめんだ。だったら、どうすればいいのか？ 私は上手く働かない頭で一つの結論に達した。

「す、すみませんが、お釣りを……台の上に置いてもらえますか？」
困惑した顔の店員。

やっぱり……こんなこと言う客は、おかしいと思われるのだろうか……。

沈黙の時間が私の不安を煽^{あお}ってくる。

不審に思いながらも、店員は台の上にお釣りを並べてくれた。卓上にいる7人の漱石を確認して、私はお札に手を伸ばした。手に掴んだ7枚のお札を、財布の中へと無理やり入れる。すべてのお金が財布に収まった後で、商品の入ったビニール袋を持ち上げた。

「あ、ありがとう……」

一言お礼を述べて、何事もなかったかのような自然な態度でレジを去る。

「ありがとうございます。またお越しく下さいませ」

店員の明るい声を聞きながら、私はお店を出た。

——うまくいった？

そうだ、うまくいったんだ！

冷たい空気を思いつきり吸い込みながら、私は小さくガッツポーズをした。お釣りを直接受け取らない事に違和感を覚えられても、

その後の行動で悪い印象は受け取られなかった。最後に発した店員の明るい声が、その事を物語っている。

そうかあゝ、こうすれば良かったんだ。簡単な事だったんだ。今度からもうしよう！

ただ何回も続けてやると、さすがに怪しい人だと思われてしまうだろう。となると、大きなお金の時だけ……だな。

夜空を見上げる私は、澄んだ空気の中で輝きを放つ星たちと同様に、清々しい気持ちの中で強い光を灯していた。

「――さあて、帰るか！」

余計な力が抜けおちて、軽くなった足取り。明日からの生活に、ようやく希望が見えてきた。私の行く手を阻むモノは、これではなくなった。

「おい、その兄ちゃん」

足早に帰路を辿る私の耳に、親しげに話かけてくる男の音が響いた。一瞬“私か？”と思ってみたが、“その兄ちゃん”という曖昧な表現では誰を指しているのかわからない。ちょっとだけ気になってしまったが、私の事であるはずがないなあ……と考えを改めて、歩く速度を緩めることなく家路へと急いだ。

「おい、兄ちゃん。聞こえてないのか？」

また声が聞こえてくる。いったい誰の事を言っているのか……。言われている方も、もうそろそろ気づいた方がよい。さっきの口調と比べて、ややトーンが落ちている。声の主は少し怒っているみたいだから……。

「おい！ 兄ちゃんよ！」

突然大きくなった声に足が止まった。まさかと思いながらも確認

のために振り返ってみる。そこには、店の前で屯っていた若者の一人が不敵な笑みを浮かべて、ジッとこっちを見つめていた。

「そう、あんただよ」

……………。

私の……事か？　だとして、いったい何の用だ？

あんたらとは初対面。別に話すことなど何も無いが……。

色々な疑問が頭に浮かぶ。若者はニタニタと笑いながら話を続けた。

「なあ、お金持っていないか？　俺たち財布落としてしまって、家に帰れず困ってるんだよ。財布の中にあるだけでいいから貸してくれない？」

別に困っている素振りもない若者は、その口からあからさまな嘘を吐いてきた。

何を言い出すんだ、こいつは。

財布の中にあるだけって、私の財布に一体いくらあると……………！？

そこで私は気がついた。

さっきATMで感じた視線はこいつなのか？　いや、お釣りを台の上に置いたときに見られたのかもしれない。

どっちにしろ、今考えるべきはそこではない。この男は私がお金を持っている事を知っているのだから。私が今考えないといけないのは――

「ご、ごめん……。今手持ちがないから、貸せないんだ」

そう、彼から逃げる事だ。この状況を打開するにはそれしかない。

私は知恵を絞って出てきた精一杯の嘘で、この窮地を乗り切ろうとした。

「別に大した金額じゃなくいいんだ。とりあえず、財布の中見せてよ」

精一杯の抵抗は、男の言葉の前に虚しく崩れ落ちた。

引く事を知らない男はこっちへじりじりと詰め寄ってくる。これ以上何を言っても無駄だろう。相手は私の言う事なんて聞いてくれないのだから……。距離を縮めてくる男に対して恐怖が芽生えた。

男のバックには、4人の男。風貌と体格からして、争い事には長けた者たちだ。私と彼らがこのまま接触してしまえば、確実に餌食にされる。身ぐるみ全て剥ぎ取られるのは当然として、もしかすると骨すら残してもらえないかもしれない。

危険な状況から私の身体はあるサインを出した。

このまま捕まれば、タダでは済まない。

そしたら、どうすればいい？

……………簡単な事、さ。

——逃げる！

私は地面を思いっきり踏んで、体を反転させながらその場から駆け出した。

5・一年前の出来事 I I I

身体を前に倒し、高く上げられた足で地面を蹴る。手に持った荷物が振り子のように振られ、体のバランスを崩そうとしてくる。私は地面を強く踏みしめている足で、倒れそうになる体を何とか持ちこたえる。そして、もう一方の足を前に出して走る事を続けた。

先導する私の足音。後方からは追跡する者の足音も聞こえてくる。耳から得られる情報では距離は僅か10メートルほど。気を許せば、瞬時に食われるだろう。

精神が恐怖に侵される一方、肉体も内側から悪魔に蝕まれている。張り裂けそうな肺に重くなっていく足。悪魔は私の体力を食らい、その身をどんどん重くしていく。身体は悲鳴を上げているが、それでも今は走り続けるしかない。

街灯が並ぶ道路を延々と走り続ける。がむしやらに通りを駆け抜ける。だが、このまま真っ直ぐ走っていても、捕まるのは目に見えている。

——どこかで撒かないと。

家とは逆方向に進んでいるため、こちら辺の地理には乏しい。下手に路地に入って行き止まりになったら最悪だ。だからと言って、進路を変えない事には追跡する者を振り払う事は出来ない。私の体力にも限界が見え始めているし、悠長に考えている時間はない。

私は覚悟を決めて、視界の片隅に見えた左の道へ曲がった。

コンクリートの建物と民家に挟まれた道。一人が通れるくらい

の生活用に作られた道。民家から零れ落ちる明かりが道を照らしているだけで、それ以外の光は何もない。舗装もされてない道は石と土だけで構成されていて、表面が凸凹している。

急にハンドルを切った体は、大きく弧を描くようにして路地へ入っていく。コンクリートの壁に当たりそうになりながらも、ギリギリのところでは何とか踏み止まる。私は態勢を整えた後、右足に力を入れて壁際に寄った体を道の中央へと戻した。

足裏に当たる石粒。舗装されていない道は予想以上に走りづらい。「待てや——！」

後ろから襲いかかる叫び声。私のすぐ後ろから聞こえてくる。

待つてなど……いられない！

時間の猶予も気持ちの余裕もない私は一段階スピードを上げる。足裏に響く石の感触が痛覚に変わった。

とにかく前へ、前へ——。

地を蹴る複数の足音が、小さな道に響き渡る。後ろとの差はどのくらいあるだろうか。確かめたいという思いはあるが、今振り返っている余裕はない。不慣れな道には足を奪われそうで、視界の悪い道には視力を持っていかれている。とても今の状態で後ろを振り向く事など出来ない。

薄暗い路地をひた走る私。十数秒の走行の末に、前方から明るい世界が顔を見せ始めた。この道の終わりまであと少し。突き当りには左右へと続く道が広がっている。

——どっちに曲がる？

右か？ 左か？

次の行動に意識が集中する。その一瞬見せただけの不注意の時間、私のつま先に固い物体が当たった。

「ああ……」

気が付いた時には、目の前に地面だけが広がっていた。

咄嗟に出た両手が身体を庇う。持っていたビニール袋を抱えながら、私の身体はそのまま地面へと倒れこんだ。手のひらと膝で摩擦が生じ、ヒリヒリした感覚が両手を覆う。周りには、ビニールからこぼれ落ちたカップ麺がコロコロと転がっている。慌てて後ろを振り返ると、5人の男たちが私の3メートル後ろで仁王立ちしていた。「兄ちゃん、往生際が悪いぜ」

さっき私に話しかけてきた男がゆっくりと歩み寄ってくる。おそらくこの中ではリーダー格の男なんだろう。ミディアムショートの茶色い髪で、ホストクラブに居そうな感じの美男子。恰好は、黒のパンツにブラウンのブルゾンを合わせて、銀色の鎖が腰回りでジャラジャラと音を立てている。

「別に悪いようにはしないからよ。財布さえ差し出してくれたら、おとなしく帰ってやるから」

近づいてくる男の影が、私の身体を覆う。目の前まで来た男はゆっくり腰を落とした。屈んだ男の目線は、ちょうど私と同じ高さになる。男の視線が真正面から私の眼にぶつかる。目と目が合っているだけなのに、男からは強烈な殺気が伝わってきた。

立ち上がれず倒れこんだままの私は、男の雰囲気飲まれている。弱肉強食の世界を、今肌で感じている。狩られるのはもちろん、私の方。ただ狩られるのを待つだけの存在。あとは男がいつ狩って出るか、それだけだ。

「ヒ口。あんまり怖がらせるなよ。兄ちゃんビビって声も出せないでいるじゃないか」

後ろに控えた男たちが、ゲラゲラと笑っている。

「兄ちゃん、さ・い・ふ」

目の前の男は、手を前に出して要求を突きつけてくる。だが、私は体が膠着して何もする事が出来ない。

「どうしたあ？　もしかして本当に動けないのか？」

ニタニタと笑いながらも、鋭い視線は依然向けられたまま。

「仕方ねえなあ……」

男は突き出していた手を更に前に進めて、私の懐へと伸ばしてきた。

……来るな。

私に近づくな。

着実に近づいてくる男の手。“この手に触れられてしまえばやられてしまう”そういう思いが体中を駆け巡る。

財布で膨れたポケットへ——あと10センチ。

襲いかかる恐怖の波は高さを増して、私を飲み込もうとしている。

9……8……7……

距離を詰めてくる狩る者の手。

6……5……4……

高さを増して襲いかかる恐怖の波。

3……2……

これ以上……近づくな！！

心の叫びが、頭の中をこだまする。

——あと残り1センチ。

これ以上直視する事は出来ない。我が身に降りかかる悲劇の終わ
りを見届ける事など出来っこない。私は自分の体で唯一動かす事が
出来る部分まぐたを下へと動かした。現実から目を背けた私は、闇の中に
その身を隠した。

辺りを包む静寂。何も見えず、何も聞こえずの世界に私はいる。
外で何が起こっているのか、情報は一切入ってこない。

どうなった？

もう財布は取られたのか？

すべて……終わったのか？

“平穏な日常に早く戻りたい”その事だけが思考を取り巻いてい
る。時間の感覚なんて、今の私には無い。ただ瞼を閉じて、ずいぶ
んと時間が経ったような気はする。

私は覚悟を決めて、ゆっくり瞼を上げた。

ドサッ

静寂を破るように、突然物音が聞こえてくる。

「いつてえ……。この野郎！」

続いて怒りに満ちた声が耳に入ってきた。外で何が起きているのか気になった私は、塞いでいた目を薄らと開けた。

暗闇を切り裂いて、飛び込んでくる外の世界。そこには、さっきまでとは一変した、意外な光景が広がっていた。

尻について倒れこんでいる男。

その周りで驚いた顔を見せている仲間たち。

私のすぐ傍までいた筈なのに、今は１メートルほどの距離が開いている。

いったい……。何が起こった？

状況が整理出来ない。

倒れこんでいる男からは余裕が消え、こつちを警戒するようにじつと睨みつけている。他の男たちからも、その男と同様の事が窺える。さっきまで狩られるだけの立場だった私は、今や狩る側の者として認知されていた。

「やさしくしてやれば、いい気になりやがって！」

倒れていた男が立ち上がる。そして、ポケットから何かを取り出した。手に握られていて全体図はわからないが、見えている部分は意外と小さい。細い形状をしていて、その長さは数センチほど。

いったい何を取り出した？

私の意識はそこに集中した。

民家からの明かりが男に当たる。取り出された物にもまた光が注がれている。光を受け入れず、反射する物体。物体の先端は尖っていて、そこから緩やかな曲線を描いている。美しい曲線は手元まで続き、銀色の光を放っていた。

「——あっ！」

男が持っているものが何であるか理解した。その瞬間、男から発せられる殺気が先ほどの倍以上に感じ取れた。

——殺される——

今度は予想ではない。結末の見えた未来だ。人間がもつ野生の本能でさえも、死を予期している。

私は後ろについている手に力をこめて、身体を起こし始めた。

早く逃げなければ……。

全身の筋肉がそれぞれ意思を持っているかのように、すんなりと体が起き上がっていく。私が立ち上がると同時に、男は狂気を持って突っ込んできた。

慌てて逃げようとするが、もう相手との距離は50センチもない。今から逃げだした所で、後ろ向きになった瞬間にグサッ。抵抗する事も出来ずに死ぬだけだ。

私は回転しようとする身体に制御をかける。そして、襲いかかる男に向かい合った。目の前に迫る躊躇のない突進物。手に握られている凶器が、鋭い牙をこっちに向けている。

死にたくない！ 死にたくない！ こんなところで死にたくない！

それでも凶器は私の胸へと突き進んでくる。目から得られる状況

を整理した有能な脳が、これから起こるシナリオを描き出した。

1秒先にあるのは血にまみれた私の姿。

その先には屍として倒れこんでいる私の姿。

最悪のイメージが脳裏に浮かぶ。

く、来るなあ！

心の声とは対照的に、口からは「うあああああ……」と恐怖に怯えた声が発せられた。

……。

………。

人間は死に際に、思い出が走馬灯のように流れるという。おそらく私が今感じているこの瞬間がそうなのであろう。すべての動作がスロー再生されているかのように、一つ一つの動きをはつきり捉える事が出来る。まるで、時の流れが遅くなってしまったような感覚だ。

私の人生はここで終わり？

まだこの世界でやりたい事が沢山残っているのに……。

死ぬ間際になって、冷静さを取り戻す。精神は《死》を受け入れようと準備を始めている。

私は……死ぬ……。
この世から……消える……。

……。

………死ぬのか、私は？

——嫌だ！

死ぬなんて、絶対嫌だ！

《死》を受け入れようとしている身体にブレーキをかける。“まだ死ぬわけにはいかない”その強い想いが、私の中で炎のように熱く、そして大きく燃え上がった。

その時だった、白い靄もやのようなモノが見えたのは。

私の身体を取り巻くように白いモノが身体から溢れてくる。まるで私の事を守っているかのように、それはやさしい温もりを持っていて、身体中を隙間なく覆っていた。

襲いかかってくる男も同じモノを纏っている。凶器もまた、それに包まれていた。

私のもとへと近づく靄のかかった凶器。距離をどんどん縮め、まずは私の心臓を的確に捉えている。直線の軌跡を残し、血に飢えた狼のように私を見据え、その牙は私の心臓へ。

鋭く尖った矛先が胸に届く寸前、凶器にかかる靄と私のモノとが先にぶつかった。

眩いほどの強い光。私と凶器との間で何かが起こっている。“来るな！”という思いに応えるよう、私を取り巻く白い靄はその厚さ

を増していく。濃度を高めながら膨れていくそれは、私を護る“鎧”となった。

——どんなモノも通さぬ。だから安心しろ——

心地よい温もりを放つソレが、私の心に語りかけてくる。いや、それは錯覚だろう。本当はこの安堵感のある温もりに、私がそう感じていただけだ。

凶器はぶつかった場所から１ミリたりとも進んでこない。それどころか、私から外れるようにその鋭く尖った矛先の向きを変えていく。凶器の先端は天を仰ぎ、次第に主の方へと向きを変えていった。突進してくる男も停止してしまった凶器と同様、私のもとへ進めずにもがいている。だが、凶器と違って全く進んでないわけではない。僅かながらこっちへ近づいている。目に見えない壁を押すようにして、男の身体は私との距離を詰めていた。

……来る！

本能がそう訴える。次の瞬間、男の握っていた凶器が手元を離れた。

障壁となっていたものが外れたため、男の体は私目掛けて勢いよく突っ込んでくる。猪突猛進してくる体は大きな銃弾となり、軌道を変えることなく私に当たってきた。

衝突の際、閃光が迸った。次に微弱な衝撃が私の身体を襲った。衝撃を受け止めた私は、一分体を後退させる。男も同じように衝撃を受けたようで、体を大きく後退させていた。しかし男への衝撃は、後退するだけで抑えきれぬモノではなかった。

踏みとどまっていた足が地面から離れる。支えを失った身体は、そのまま宙へと投げ出された。宙へ浮いた男の体に、凶器が主を求めて飛びかかる。離れゆく主を追いかける凶器は勢い余って、鋭利な刃を男の身体に突き刺した。

男の右肩に噛みついた凶器は、赤い液体を吸い出していく。赤い液体を撒き散らしながら、男は緩やかな放物線を描くように空へと上昇する。……そして、一定の高さまで上がった身体は重力に引つ張られて地面へ。そのまま落下する男は、地球に叩きつけられた。

すべては一瞬の出来事だった。時間にして1秒も満たないほどの……。

遠ざかる男の勢いは地面と衝突しても止まらず、バウンドしながら更に離れていく。呆氣にとられる仲間たちは、その姿を黙って見送っていた。

男の身体が停止すると、仲間たちは正気を取り戻し、すぐに彼のもとへと駆け寄った。

「ヒロ！」

「ああ……くそお——！」

右肩を抑えて痛みに耐え、声を上げる茶髪の男。歪められた男の表情に、仲間たちは啞然としている。

いったい何が起こったんだ？

どうしてヒロに凶器が刺さっている！？

声には出していなくても、顔に言葉が表れていた。

その反対側に立っている私は有り得ない現象に驚き、酷く動揺し

ていた。

さっき見えたものは何なのか？

私の身体に何が起こっているのか？

殺人が行われようとした路地に、男の呻く声が虚しく響いていた。

悲痛な叫びに包まれた世界は、黒い夜の闇を更なる深い闇へと変貌させる。闇と言う名の怪物は弱い心を食らって、思考を徐々に衰退させていく。冷静さを欠いた私も怪物に手足を囚われて、体の自由を失いかけていた。

「いつたい、こんな夜中に誰だ？」

「ねえ、あなた。やっぱりこれ悲鳴じゃないの？」

非現実な世界に現実の音が紛れ込んでくる。民家から聞こえてくる話声。そして、誰かが走ってくる足音。きっと男の叫び声を聞いて、何が起こっているのか確認しに来ているのだろう。

近づいてくる足音を聞きながら、私は冷静さを取り戻していった。そして現状を分析できるくらいに落ち着いた時、ある事に気が付いた。

駆け付けた者が今この光景を目にしたら、何を思うだろうか……。

立ち尽くしている私。

怪我を負った仲間を心配する若者たち。

どう見ても、私が加害者、彼らが被害者、普通の人はそう捉えるだろう。

ここにいてはいけない。

状況を整理した結果、脳から指令が出される。

逃げる事以外考えつかない私は、身体を翻して路地を後にした。去り際にチラリと見た彼らの眼には、憎しみの光が灯っていた。

家までの道を走り抜けていく。なぜこんなに急いでいるのかはわからない。ただ早く家に帰らなければという使命感が、私の身体を駆り立てていた。

走っている最中、ヒリヒリとした痛覚が足を襲った。膝に出来た擦り傷。そういえば、転倒した際に膝を擦りむいていた。コンビニで買った物も、結局あの場所へ置いて来てしまっている。

私はいったい何をしていたのだろうか？

先程まで命の危険に晒されていた事など忘れて、日常の感覚が戻っている。今や生死の綱渡りを無事に渡り切った事より利益にならない行為をしてしまった事の方が、私の中での順位は上だった。

部屋に戻ると、疲れが一気に全身を襲った。私は疲れから逃れるように、他には目もくれずベッドへと急いだ。電気も点けずに、部

屋の奥へと歩いて行く。リビングへのドアを開けると、そのままベ
ッドへ倒れこんだ。身体から力が抜けていく。微かに残っていた意
識も、闇の中へと沈んでいった。

6・一年前の出来事 I V

ピピピピッ、ピピピピッ……

目覚ましの音が聞こえてくる。うるさく鳴り響く機械音に、意識が徐々に活性化させられる。私はゆっくり体を起こして、鳴く事を止めないアラームを止めた。

「ん……」

両手を組んで背伸びをする。歪んでいた体の芯が、真っ直ぐに訂正された。

起きて間もない私は、虚ろな世界を彷徨っている。体はだるく、力が入らない。そこにお腹の虫が、“食糧よこせ”と言わんばかりに強烈な泣き声で茶々を入れてくる。ジタバタと暴れる虫は私のお腹を叩き出し、スイッチの入らない身体を無理やり起動させた。

私はまだ働かない頭を抱えてベッドから起き上がり、ふらつく足でキッチンへと向かった。冷蔵庫、買い置き用の棚を開けたが食べ物は見つからなかった。

「……なんで何も無いんだっけ？」

寝ぼけた頭で必死に考える。普通なら無くなる事前に買っておくはずだが、目の前にある現実はそうではない。いつもと異なる事態が起きている。習慣として身に付いた行動を起こしていない自分に對して、私は疑問に思った。そして昨日の行動を振り返っていった。

昨日は昼過ぎに目を覚ました。確か昼ドラの時間帯だった。その後日中の外出を避けて、部屋の中で過ごした。そして夜になって、お腹を空かせた私は、確か………！！

そこで、やっと昨日の事を思い出した。

「そうだ、昨日コンビニに行ったんだ。で、食料を調達して……
…ん？ 確かに、買い込んだ……よな？」

そう、買い物に行った。これは間違いないはずだ。
だとしたら、なぜ食べ物がないんだ？

「何か大切な事を忘れているような……」
言葉に出しながら、自分の記憶を読み返していく。

買い物カゴをぶら下げて歩く私。
レジに向かって会計をする私。
何とか会計を済ませて、店を出る私。
そして……。

『——い、——ちゃ——』

ノイズ交じりの音声が脳内を過る^{よぎ}。

『おい、そ——ちゃ——』

何を言っているのか聞き取れない。脳裏に映る昨日の映像も、酷い画像で見れたものではない。それでも私はそこに隠された真実を知るために、繰り返し再生を続けた。

映らないテレビのように砂嵐が吹き荒れる映像。その途中でチラつく記憶の断片と、掠れて聞き取れない人の声。サブリミナルのように一瞬映っては、すぐに砂嵐にかき消されていく。しばらく時間をかける事によってチラつく断片が組み合わせり出した。流れる時間も少しずつ長くなってきている。

「……………」
意識を全て集中する。針穴に糸を通すように、記憶の糸を紡いでゆく。

『おい、そのの——ちゃ——』

『おい、そのの——ちゃん』

『おい、そのの兄ちゃん』

「——あつ！」

そして、ついに思い出した。

解けなかった謎が解けた解放感が、私の胸一杯に広がる。しかし、それも束の間。蘇ってくる記憶は私に不快感をもたらした。

「不良に……絡まれた……？」

昨日私は不運にも、不良にこの身を狙われた。しかし私の心を揺さぶっているのは、そんな些細な事ではない。この先にあるとんでもない“何か”だ。

「……逃げた……逃げた……でも、逃げ切れなかった……。それからナイフを向けられて……命を狙われて……」

あの時の状況が蘇ってくる。今がそうであるわけではないのに、私の心臓は激しく取り乱している。

「……それで——っ!？」

身体を下から上へなぞる様に観察する。昨日私の身体に現れた、

あの白い物体を確認するために……。

あの時、私を包んだ白い霧。私の命を守ってくれた白き衣。アレが無かったら、今の私は存在していない。だが、アレは現実存在して良いモノではない。もしも存在するとしたら、《私がおかしくなった》か、若しくは《身体に異常が起きている》かのどちらかになるのだから。

私は塵一つ見逃さないように、じつくりと観察を行った。だが、アレが見える事はなかった。

「何ともないか……」

見えなくて良かったはずなのに落胆している。それは私の中にある考えが浮かんだせいだ。

見えないという事は、つまり昨日の記憶が現実の出来事である信憑性がないという事だ。不良に絡まれるという出来事事態、現実に起こりうる確率は低い。となると、昨日買い物に行ったという記憶は、実は偽りのモノであった事になる。買い物をしたのにその痕跡が見当たらないとなれば、どちらかというと偽りである可能性の方が高い。

疑心暗鬼になっていく私は、徐々にパニックへと陥っていった。正常な判断が出来なくなった事により、昨日の出来事を証明するモノを求めて、更に回想を続けた。

「……………で、そうだ！ 確かあの後、男にナイフが！」

流れてきた映像に、私は微かな希望を見出した。すると、居てもたっても居られなくなって、駆け足でリビングに戻り、テレビの電源を入れた。

現在午前7時、ちょうどニュースの時間帯だ。私はチャンネルを切り替えながら、テレビに嚙り付いた。

テレビの向こう側では、テロ対策に関する問題から、議員に持ち

上がる疑惑、民間企業の偽造問題に大手企業の不正疑惑など、昨日会った出来事が述べられている。途中芸能界の話題を挟んで、辛気臭い雰囲気を払拭する華が添えられた。

時計の針が8時を示す。ブラウン管の中では、ほとんどのニュース番組が終了を告げている。私は一時もテレビの前から離れず、流れる映像を見続けていた。しかし、あの出来事を事件として扱っているところは一つもなかった。

確かに大げさになる事ではない。普通に考えれば、ニュースとして取り扱うには規模が小さすぎる。でも、“もしかしたら”という小さな願いを捨てる事は出来なかった。今の私には微々たる希望でも信じる価値があったから……。

今の私は病気が治ったばかりで精神的におかしいところがある。もしかすると、まだ治っていないのかもしれない。あの出来事が夢だったという可能性が出てくれば、もしかしたら最近続いている出来事も私の妄想という仮説が発生してしまう。そう考えたら、今見えているモノや踏みしめている床の感触、息をしている事さえも本物であるか疑わしい。正直、今生きている事さえも不安に思えてくる。

生死の狭間にいるような不安定な心情を抱えている私は、何気ない言葉を口にした。

「とりあえず気分を変えないと……。風呂にでも、入るか……」
今のままでいる事が辛い。一度心も体もリセット出来るなら、それをした方が良い。

私は霞のかかった視界の中で、風呂場を目指した。

蛇口を回し、シャワーからお湯を出す。無意識に手で温度を確かめながら、私は適温になるのを待っている。手に当たる水の冷たさは現実のモノであるはずなのに、それすら一瞬の気の迷いであるみたいに私は感じていた。

流れる水が温かくなったところで、頭からシャワーを浴びていく。身体を包んでいく温水は身体のある部分を通り、疲れを流していく。“私もこのお湯のように人を幸せに出来たら良いのに……”。いつその事、同化してしまいたい”そう思いながら、身体が温まっていく気持ち良さに、少しだけ心が開放的になった。

体がほんのり温まると、私はシャンプーに手を伸ばした。左手でポンプを押して、細い口から出てくる原液を右手にのせる。それを手と手でこすり合わせて、原液から泡の状態へ持つていった。

「……………うう！？」

泡を立てていると突然、手のひらをピリツとした痛みが襲った。よく見ると、手のひらに複数の擦り傷が見られる。

「これって、昨日の……」

あのととき、擦りむいた傷だ。私は更なる確証を求めて、膝の方も確認した。そこには予想通り、擦りむいた跡があった。つまり、昨日の事は本当に起こった出来事だった、という事だ。

胸の内を覆う黒い霧が、すうつと姿を消していく。晴れ渡る心の中には、温かい鼓動が響き始めた。

私は手に刻まれた昨日の痕をじつと見つめている。そこから伝わる現実の痛みは、今までの記憶が正しいモノであることを私に教えている。傷ついた体に心を癒されるなんて思ってもみなかった。でも、私は今確かに怪我した事に助けられている。『怪我の功名』という言葉を作った人の心境は、こういう感じだったのかもしれない。降り注ぐ熱気を帯びた雨に打たれる私は、先程まで抱いていた不

安を体の外へと追い出した。黒い思いは私の身体を離れ、シャワーの水に乗って排水溝へと流されて行った。

風呂から上がった後、冷静さを取り戻した私は財布を確認した。財布の中には4枚の一万円札があり、記憶が正しい事を証言してくれた。

真実が明るみになり、生きている実感を手に入れた。……だが、それに対して素直に喜べない私がここにいる。

生きているという現実。
存在しているという事実。

しかし、それを打ち壊そうとするモノが私の身近にいる。

他者を受け付けない非現実的な身体。
私を憎む人間の存在。

『今までの暮らしを送る事は出来ない。ここで暮らしていく事はもう出来ない』

頭の中に語りかけてくる現在を否定する一般的な意見に、私も同じような思いを抱いていた。

今住んでいる場所は人口20万人の都市で、人と関わり合う事が少なくない。こんな身体になってしまったのであれば、もっと人の少ない場所に移動すべきだ。それに、この身体では収入を得る事も難しく、家賃の高いこの場所に居続ける事は得策ではない。どのみ

ちこのマンションからは、出る必要がある。

またこの街に居続けるのであれば、あの不良たちと遭遇する危険性が伴う。あいつらは仕返しをするために私を探しているはずだし、偶然会ってしまったら次は本当に殺されるだろう。そんな危険と背中合わせの生活するのは御免だ。

「やっぱり、この街を出るしか……」

私は大きな溜息を吐き出しながら、思い出の詰まったこの街から去る決心を固めていった。

2週間後、すべての準備は整った。不良たちに見つかからないよう隠密な行動で準備しなければならなかったが、時間をかけてやれば、それなりにうまく行えるものである。インターネットのような便利な道具は無いが、自分の足と携帯電話という2つの手段だけでも事を進めるには十分だった。

まず、荷物の整理。これは意外に早く片付いた。初めから必要最低限の荷物以外は全てじいちゃんの家に送ろうと思っていたので、一番最初に行動を起こした。荷物をどうしようか迷う事はなかったが、思惑通りに荷物を引き取ってもらえるか、そこが問題だった。

私は携帯電話を片手に、震える指でダイヤルを押した。久しぶりに電話を使う、久しぶりに連絡を取るという事は、思っていた以上に緊張する行為だった。

じいちゃんの家へ2年振りの連絡。呼び鈴が止むと、受話器の向こうからしゃがれた女性の声が聞こえてきた――ばあちゃんだ。ばあちゃんは私の声を聞くと、すぐに相手が私である事に気づいた。その後は緊張することもなく、会話をすることが出来た。会話のほとんどは私の近況についてだった。私は何不自由のない生活を送っていると言いつき、ばあちゃんに余計な心配をかけないようにした。ばあちゃんは「文哉ちゃんが無事で良かった」と涙を流しながら、本題である引越しの件を快く聞き入れてくれた。

次に退室の届け出や様々な契約解除だが、これも全部電話で済ませることが出来た。一度ばあちゃんに電話をした事もあり、この時には電話をかける行為に対して、ほとんど緊張することは無かった。

残った最後の問題は“住む場所を何処にするか”だ。これが一番時間がかかった。でも今となっては過去の事、もう解決済みである。新住居はここから遠く離れた田舎町にあり、家賃タダの水道・電気が通っている物件だ。町に住んでいる人の多くが高齢者で、畑や田んぼの残っているのかな場所である。住居から少し歩けばコンビニもあるので、生活に困る事はないだろう。快適な暮らしとまではいかないものの、今の暮らしよりは幾分マシだ。

いい条件だけに目を奪われてしまうが、こんな物件が誰の手にも触れられずにいるという事はそれなりの理由が存在する。とは言っても、問題は一つだけ。しかも、私にしたら左程気になる事ではない。部屋へ上がるための階段が酷く老朽化していて、階段の上り下りに危険が伴う、たったそれだけの事なのだから……。

これからの人生に不安はあるが、今日から新たな人生のスタートとなる。

12月10日、私の新しい生活が始まった。ちょうど一年前の出

来事である。

——序章（完）——

第一章 逃避行の果て 1 逃避（前書き）

【あらすじ】

奏^{カナデ} 文哉^{フミヤ}は精神病から立ち直り、以前の生活を取り戻そうとしていた。しかし、そのささやかな願いは叶えられなかった。なぜなら、彼の身体は以前のものとは別のものへと変わっていたからである。彼の身体に訪れた変化、それは“接するモノを無意識に拒絶してしまふ特異体質”だった。

そんな彼にある晩、不運な出来事が降りかかる。見ず知らずの男たちに突然襲われたのだ。その出来事により、彼は自分自身に宿る力の存在を認識することとなる。

それから一年後……

環境を変えて暮らし始めた文哉。生活は幸せと呼べるものではないが、彼にとってはこの上ない平穏だった。しかし、運命はそれを許さなかった。一年前に出会った男たちとの再会。偶然が起こした不運な出来事に彼はまた巻き込まれることとなる。

第一章 逃避行の果て 1・逃避

「ハア、ハア、ハア」

呼吸が荒くなってきた。私の身体は酸素を求めて、口を最大限に開ける。空気の入りによって、喉はカラカラの状態だ。体内からわきあがる熱気は外気と交わり中和される。体の表面を流れる汗が冷やされて、冷たさだけを感じた。

今、私は走っている。必要に迫られて走らされている。時間に追われているわけでも、健康のためでもない。数分前に遭遇したある男たちから逃れるために走っている。

私の後方には3人の男がいる。一定の距離を保ったまま、ずっと追いつけている。彼らの表情は苦しさ^に歪められて、いつ倒れてもおかしくない状態だ。きつと限界を超えてなお、走り続けているのだろう。

体力にまだ余裕のある私は、追撃する彼らを引き離しにかかった。少しずつ速度を上げ、一歩ずつ彼らとの距離を開いていく。去年から取り組んでいたジョギングのおかげか、ペースアップにも私の身体は平然としている。一定のリズムで繰り返される血液だけが流れる量を増したくらいで、他に変化するモノは無かった。

逃げ切るには十分と思える距離が出来たとき、私は視界に映り込んだ脇道へと進路を変更した。直線に延びる道から右へと曲がる。右折した先はさっきの道より街灯の数が少し減っていて、視界が狭^{せば}まった感じがした。

薄暗い道をひたすら走る私。通りには私の足音だけがこだましている。どうやら追手は、まだこの道に入ってきていないらしい。こ

のチャンスを生かさないわけにはいかない。一気に距離を開けるべく、地面を強く踏んだ。

風を追い越して、風とすれ違って、200メートルくらいの距離を走ってきた。足音は先ほどと変わらず一つだけ。追手は未だにこの道へ入ってきていない。

——このまま行けば逃げ切れる！

そんな喜ばしい状況であるのに、私は気味悪さを感じていた。なぜなら、奴らが追う事を諦めたとは考えられないからだ。

……いやな予感がする。

冷静に分析した結果、たどり着いた不安。それはこの後、現実のモノとなる。

ブウン、ブルン……

遠くから聞こえてくる機械音。^{エンジン}ちょうど私の後ろから聞こえてくる。音はすごい速さでこっちに近づいてきて、ある距離まで来た時に止まった。

「！？」

突然視界が明るくなる。辺りが光に包まれている。目の前には足元からのびる黒い影。私の後ろに強い光源体があるようだ。

光が放たれる方から再び轟音が鳴り響いてくる。走りながら、私は後ろを確認した。

強い光を放ち、轟音を起こす物体。γ（ガンマ）のような形をした物体。それは――バイクだった。道の突き当たりに2台のバイクが並んでいる。光の向こう側には、あの男たちがバイクの後ろに跨またがっていた。

「ウソ……だろ？」

不安に駆りたてられて乱れ出す呼吸。波が引くように身体から血の気が引いていく。

額に汗を浮かべる私は焦りを感じた。いくらなんでもあんな物から逃げ切れるわけがない。そんなこと頭ではわかっている、私は前に進むしかなかった。

バイクの車輪がゆっくり回り出す。道に転がる石粒を踏み、タイヤが前進を始める。鳴り響くエンジン音を合図に、バイクは私に向って勢いよく走り出した。

私は走りながら、辺りを見渡す。この道を走り続けるのはまずいと判断したからだ。どこか身を隠せる場所がないか探していると、私の視界にある建造物が飛び込んできた。

そこは周りを塀に囲まれて、敷居に複数の建物を並べている。建物の壁や屋根の所々に錆びつきが見られ、頑丈な造りにもかかわらず老朽化が進んでいる。長い間人の手に触れられていないその場所は、闇の中で不気味な存在感を放っていた。

建物が似たような背丈で立ち並ぶ中、一つだけ浮き出た様に空へと伸びている物体がある。煙を噴き出す動作を忘れてしまった煙突だ。どうやら、ここは昔工場だったらしい。堂々とした姿を見せる煙突は、この工場のシンボルだったモノだろう。今や空虚感を醸し出すだけの存在となってしまうているが……。

時の流れに取り残されてしまった工場。

私はある決心をして、その場所へと足を踏み入れた。

高い塀にぽっかりと空いた入口。トラック一台が通れるくらいの広さを持っている。入口には人の出入りを拒むものはなく、スピードを殺さずに中へ入る事が出来た。通る時によく観察すると、“立ち入り禁止”の札を提げた鎖が地面に転がっている。何かの拍子で鎖が切れ、地面に落下したみたいだ。

入口をぐぐり抜けて、闇の中を疾走する。暗い場所に慣れてきた目は、影に覆われた世界の中でも役割を十分に全うしていた。

敷居の中に入った私は、走行する道の直線上に佇む鉄筋コンクリートの建物がまず目に入った。2階建ての白い建物で、中央に立派な玄関を構えている。おそらく事務所だった場所であろう。昔は真っ白な壁で清楚な雰囲気を漂わせていたのだろうが、今では白い壁に赤褐色の模様が浮かび、玄関は固く口を閉ざしている。全く人を寄せ付けないオーラを遠くからでも感じとれた。

走りながら目線を右に流す。白い建物の右奥にトタン製の大きな倉庫が見える。製作所……だろうか。入口は車が入りできるくらいの幅があり、扉がなく中の様子が丸見え状態になっている。とはいっても、今は夜。闇に包まれた状況では、中に何があるのかまでは分からない。唯一分かるのは、建物内に数本の月光が差し込んでいる事。屋根に穴が開いているのではないかと憶測によって、導き出される建物の情報だけである。

既に口を開けて来るものを拒まず、私でさえ迎え入れてくれそうな場所。そこに私は狙いを定めた。

目的地まで数十メートル。その手前には雑草がモシヤモシヤと生い茂り、行く手を阻む者たちがズラリと顔をそろえている。目的の場所へ行くにはそこを除くと、少し遠回りであるが、今走っている砂利道から分かれる大きな弧を描いた道が一つ。最短距離で行きた

いと思う自我を押さえて、私は砂利の道を選んだ。

足音を消す事の出来ない道を走りながら、私は後ろを振り返った。追ってくるバイクはちょうど工場の入口あたり。そこでバイクは停車している。どうやら、私を探すのに時間を食っているようだ。距離も少し開いており、今が好機だと考えた。

前を向いた私は、膝を高く上げて速度を上げる。足音もそれに比例して、響かせる音量を上げた。

次の瞬間、バイクのライトが私を捉える。どうやら見つかつてしまったらしい。映画の脱獄シーンみたいに、円形の光が私を包んでいる。

遠くから私を照らす光源体は大きな叫び声を上げた。大地を揺さぶり、大気を振動させる轟音。大気の震えは私の所にまで届いて来て、私の中に潜む小心者の心呼び覚ました。慌て出した心は、手足をより機敏に動かそうとする。最高速度に向かって、走るスピードがぐーんと上がった。

気が付くと、入口は目の前にあった。大きく開かれた建物の口は、私に“早く入れ”と言っている。私は迫る魔の手から逃れるように、そのまま建物の中へと姿を消した。

建物内に避難した私は、膝に手を付き、呼吸を落ち着かせている。心拍の乱れた体は突然ブレーキをかけられた事に酷く戸惑っていた。

動け、動け、と訴える心臓を抑えながら、私は胸を大きく膨らませてゆっくり呼吸を整えた。

少し気持ちが和らいだところで、私は建物内を見渡した。建物の中には学校の体育館3つ分くらいの大きな空間が広がっている。天井から漏れる光が木漏れ日のように建物内を優しく包んでいて、外の異様な雰囲気とは明らかに違う空間だ。月光のスポットライトを浴びている錆びた機械や崩れた机は、絵画のように芸術的な存在となっていた。

私は息を整えながら中央へと歩いて行く。外から魔神^{マジン}の唸る声が近づいているが、気にならなかった。空間に漂う神秘的な空気が外との関係を一時的に遮断してくれているみたいに、今の私にはこの空間だけがリアルな世界だった。

歩く音が響き渡る。波紋のように広がっていく。私が存在している事を、ここは強調してくれている。

冷たくも優しい風が私を包む。心がこの雰囲気^{マジン}に飲まれていく。

なんて……落ち着く場所なんだろう。

心が解放されていく感じがして、体が急に軽くなった。逃げ続けて来た私にこの場所は“もう逃げる必要はない”と優しく語りかけてくれる。それは迫りくる狂気の中に訪れた、ひと時の安らぎであった。

そんな時間を壊すように、乱暴なバイクの音が割り込んできた。建物内を照らす人口の光。さっきまで存在した空間は、一瞬にして別の世界へと変わっていった。

「ずいぶんと逃げてきたな、兄ちゃんよ！」

男のこもった声が建物内に響く。私は振り返って、彼らと対峙し

た。

入口付近でバイクを停車させて、茶髪の男が地面へと降り立つ。ひとりバイクを降りると、それに続くように他の男たちもバイクを降りていく。全員がバイクから降り立った後、最初に降りた男が先頭に立つて、こつちへと近づいてきた。続く4人の男は横に広がって、私の逃げ道を塞ぐように歩み寄ってくる。

「覚悟はできてるんだろうな」

バイクのライトがこつちへ向けられていて、彼らの顔は影となり表情はわからない。……が、殺気がこつちに向けられている。これは、確かな事だ。私の体にべつとりと張り付く憎悪の念を、私は感じ取っている。

「まさかこんな人目につかない場所を死に場所を選ぶとは、正直驚いたよ」

男たちは、各々の手に武器になる物を抱えている。処刑執行の準備は整っていた。

先頭に行く男の歩みが、徐々に速さを増していく。歩くから、走るへ――

「それじゃあ……おとなしくやられろや！」

声を上げる男たちは、一斉に襲いかかってきた。

迫りくる男たちを前にして、私は構える事もせず、ただ立ち尽くしている。逃げようなんて素振りは一切見せない。近づいてくる男たちをただ静観している。

十分距離がある事を確認した私は、ゆっくり目を閉じた。

身体の中を流れる血液。

打ち付ける心臓の音。

走ってくる男たちの声。

真っ暗な世界の中で、すべての事を感じ取っていく。

存在する私の身体。

その周りを取り巻く空間。

感じる……私の周りにある温かな空間を。

私はゆっくりと瞼を上げた。目を開けた先に広がる世界は、さっきの世界とは異なるモノになっていた。

自身を取り巻く白いモノ。男たちの体にも同じモノが取り巻いている。靄のかかった映像は夢の中にいるような感覚だ。意識を集中させていくと、輪郭の定まらない物体がその姿を形有るモノにしていく。私の体に纏わりつくモノは少しずつ膨れ上がり、その存在を明白なものにしていった。

——すべての準備は整った——

私は殺気を纏う男たちに対して、迎え撃つ構えをとった。内から溢れる力に、身体が興奮している。漲る力^{みなぎ}は心まで飲み込み、私を狂乱させていく。冷静だったはずの思考は突如乱れ出し、今まで抑えていた感情に支配されていた。

“さあ——はじめよう。愚かな者たちへの制裁を——。”

この状況において、武力の使用を認める。

今まで避けてきて、溜まりに溜まった想いよ——思う存分暴れるとよい”

2・もうひとりの存在

空に浮かぶ丸い月。今宵の空を明るく照らしている。瞬く小さな星屑たちは主役の輝きにその存在を奪われ、夜空は夜明け前の景色のように淡い藍色をしている。月明かりの下で舞を披露している風たちは、高めの声で唄を奏でながら縦横無尽に辺りを走り回っていた。

ここは都市部から離れた田舎町。

時刻は午前3時前。

民家に灯っている明かりは一つもなく、光を放っているのは24時間営業のお店、そして無人の通りを照らす街灯のみ。静寂に包まれた町の光景は、まるでゴーストタウンのようである。

そんな雰囲気だからだろうか。何もない土地にポツリと浮かぶ廃工場が、妖しいオーラを放っている。今でこそ廃れた存在になってしまっているが、昔は多くの人間が働く製紙工場だった。そこには活気に溢れた人間たちの生きる力と将来の夢が詰まっていた。しかし、20年ほど前に閉鎖されてからは、全く人の寄り付かない場所になってしまった。閉鎖の原因は、新天地への工場設立とこの土地における環境汚染の問題。住民の批判を浴びた工場は、閉鎖後誰に立ち入られる事もなく、ひっそりとそこに存在し続けた。今でも人が出入りする様子はなく、心霊スポットのような場所にもなれず、ただその場所に佇んでいるだけである。

誰も踏み入らない敷地には一本の煙突がある。地上100メートルにまで達する長い煙突。その堂々とした姿は、この街の何処からでも確認する事が出来る。逆に、煙突の頂上へ登れば、この街のすべてを見渡す事が出来るだろう。

街を一望できる煙突の頂上。そこは何モノにも触れられる事のな

い絶対領域。……そう、触れられる事なんて決して有り得ない……はずだった。

その瞬間は、何の前触れもなくやってきた。

ある人間が煙突の頂上に立っている。

目をそらした瞬間に現れた？ 気を取られていた瞬間に現れた？

……いや、そういうものではない。さも前からいたような……そんな感じた。

空から降りてきたのか、地上から昇ってきたのか、そんなことは当然わからない。あるのは“煙突の頂上に人がいる”という事実だけである。

煙突に立つ人間は、黒のダウンジャケットにジーンズといった普通の出で立ちをしている。髪はオレンジがかった茶色をしていて、肩にかかるくらいまで伸ばしている。釣り上がった目は獲物を狙うハンターのように鋭く、細く整えられた眉は端正な顔立ちを凜々しく見せていた。月明かりに浮かぶ透きとおるような肌は曇り無き白さを持ち合わせ、男とも女ともとれるような顔には、性別がどちらであっても変わらない美しさがあった。

その人間は上空を吹き荒れる風に髪を靡かせながら、じつと地上を見下ろしている。タカのような鋭い眼光で辺りを睨めつけて、変化のない硬い表情からは誰も近寄らせない冷徹なオーラを感じる。ピクリとも動かず立ち続けている様子から、この人間は今から起こる何かを待っているようだった。

タッタッタッタッタ……

無人の街から音が生まれる。闇を割って出た音は静寂を破り、地上から100メートル離れた煙突の上にまで届いていた。

煙突の上にいる者は、耳から受けた情報をもとに音の発生場所を探っている。薄暗い町をざっと見渡して、ある所でピタッと頭を止めた。瞳の中で動く小さな物体。その者の眼には音を発する生き物の姿が正確に捉えていた。

ここより少し離れた場所を4人の人間が移動している。向かっている先はわからないが、徐々にこっちへと近づいている。1人の人間を3人の人間が追いかけている構図。街灯に照らされた姿、走っている動作から見ても、4人の人間は男だろう。

走る男たちを観察していると、彼らから少し離れた場所で異なる音が発生した。

焦点を彼らの位置より少し上にずらす。そこには、白い光を放つ2台のバイクの姿があった。

移動している者たちが進んでいる道の後方——24時間営業の店の駐車場で、丁度今動き出そうとしているバイク。だがバイクに跨る2つの人影は、ハンドルに手をかけつつもアクセルを踏む様子はない。互いに顔を見合せて、唇を上下に動かしている。走行する男たちがいる方を指さして何やら話をしている事から、どうやら進行方向は同じのようだ。

バイクに跨る2人のライダーはしばらく話し合った後、発車する

事なく車体から降りた。そして、駐車場に止めてあるワゴン車に向かい、トランクの扉を開けた。トランクから取り出したのは2本の棒。木製と鉄製の2種類で、それらを持って再びバイクへと戻っていく。棒を持ちながらハンドルを握る2人は、今度こそアクセルを吹き鳴らして、駐車場を飛び出した。

視点を切り替えて、再度走っている者たちへと戻す。

追われる男と追う男。その差はさつきよりも開いていた。

スピードが加速していく逃走者。それに対して、追跡者はどんどん走る速度が落ちていく。両者の力差は歴然。このまま行けば、両者が交わる事はないだろう。

前に行く男は一瞬後ろを振り返り、まだ体力に余裕がある事を見せた。そして、身体の軸を斜めに傾けると、突然進路を変更した。

右に曲がる男。男が曲がった道、そこはこの工場の前を通る道だった。逃走者はこちらに向かつて、変わらぬ速度で走ってくる。追いかける者たちはターゲットの消えた通りをよろけながら歩き、そして、ついにその歩みを止めた。

立ち止まった男たちの後方から、先程のバイクが走ってくる。バイクは立ち止まっている男たちに出くわすと、速度を落として停車した。

バイクに乗っている者は、歪んだ表情で呼吸を諫めている男たちに何か言葉をかけている。どうやら彼らは顔見知りらしい。

話が終わると、バイクに跨る男は手に持っていた棒――バットと鉄パイプを彼らに差し出した。それを2人の男が受け取る。受け取った後、男たちは2台のバイクにそれぞれ分かれて座った。

1台目のバイクは2人の人間を、もう片方のバイクは3人の人間を背負い、ゆつくりと車輪を回し始める。前進を始めたバイクは、逃げた男の軌跡を辿るように闇を照らしながら道路を走り出す。ど

うやら追う事を諦めたわけではないらしい。逃走する男が曲がった場所まで来ると、バイクは逃走者のいる道路に向かって光を放った。

光に包まれて闇から引きずり出される逃走者。

ターゲットの位置を明確に割り出した追跡者。

目の前の通りで、今逃走劇の第2章が幕を上げた。

逃げ惑う男は走りながら、顔を上げて周囲を見渡している。辺りには木造の住居が数軒並んでいるだけで、後は寂しい田園が空いたスペースを埋めている。目ぼしいものなんて何もなかったため、浮き立った存在であるこの工場に男の視線は向けられていた。

彼の瞳に何が映っているのかはわからない。ただ煙突の上にいる人影には、決して気づく事はないだろう。あり得ない事実というモノは、無意識のうちに排除してしまうから。

——ある日手から6本目の指が生えたとする。その事を口に出さず日常生活を送った時、その変化に気づいてくれる者が一体何人いるだろうか。きっと、そう多くはないはずだ。

UFOというモノもそうだ。ある人が空に浮かぶ物体を“普通とは違う”と思わなければ、その存在は今も確認されていなかったかもしれない。

廃墟にそびえ立つ煙突の上に人がいるなんて事も、常識的にあり得る事では無いだろう。一瞬視界に映ったとしても、きっと見落としてしまうはずだ。余程注意深く観察しない限りは、そこに違和感を覚える事もない。冷静さを欠いた彼の状況からして、些細な事に意識が向く事は無いと断言できるだろう。

彼からしばらく向けられていた視線は、バイクの音によって路上へと戻っていった。

逃げる男と追いかけるバイク。その間にあつた距離は、あつという間に狭まっていた。800メートル程あつた距離は、今や半分にも減っている。もはや逃れる術など残っていない事は明白だ。

それでも男は逃げ続ける。捕まるまで、あと30秒くらいだろうか。襲いかかるバイクとリミットタイム。終焉はもうそこまで迫っている。

彼の運命は誰もが予想できるものであろう、神でもない人間でさえも……。

運命に立ち向かう男は、結末の書き換えを試みる。身体を斜めに倒しながら、この工場へと足を踏み入れたのだ。だが、工場に入っていく姿は追跡者の目にしっかりと確認されている。つまり、男の取った行動は時間を稼ぐための悪あがきに他ならない。

工場内に入った男は、ある建物に向かって走っていた。入口から2番目に近い場所にある、古びた建物へと……。逃げのびたいという想いがあるのであれば、もっと別の場所にすべきだ。入口からその建物まで何の障害もなく、逃げる後ろ姿が丸見えなのだから。

男が建物を目指す中、バイクで追いかける男たちもようやく工場入口へと辿り着いた。バイクに乗っている男たちは一瞬ターゲットを失っているように見えたが、すぐに所在を掴んで追跡を再開した。逃げる男が建物へと入っていく。それに遅れる事数十秒、バイクも建物内へと姿を消した。

煙突から一部始終を目にしていた1人の人間。その顔には、薄らと笑みを浮かべている。どうやら興味をそえられる出来事だったらしい。

その怪しい人間は、男たちが消えていった建物をじつと観察している。建物の中まで見透かしてしまいそうな強い眼光で。

ヒュウウ……

一際強い風が、煙突の周りを吹き抜ける。その刹那、煙突の頂上に変化が起きた。

月明かりの下で佇んでいた一つの人影。その姿が忽然と消えている。

煙突から落ちた？ 空へと飛び立った？ ……いや、それは無いだろう。もしそうであるならば、行動を起こす瞬間くらいは確認できても良いはずだ。だというのに、その者が姿を消す瞬間は確認できる事が一つもなかった。

もしもこの現象を言葉で表現するならば、一つの喩えしか浮かばない。それは現れた時とは全く反対の言葉。

まるで、そこに《何も存在していなかった》ような……………。

3・畏れ

廃工場の一角にある大きな建物。その建物内を今殺気が充滿している。中には、凶器を手に取り襲いかかるうとする5人の男と、その圧倒的な殺気を目の前にして冷静な態度をとり続ける1人の男の姿があつた。

襲いかかる男たちは、風貌からして不良と称される荒くれ者。一方、迎え撃つ形になっている男は紺色のジャージに身を包み、疎らな長さではあるが染めもセットもしていない髪と髭や眉などの手入れがキチンと施された顔を持つ一般人である。

一般人の名は奏 文哉（カナデ フミヤ）といい、普段は温厚な性格で人を傷つけたり、自分が傷ついたりすることを恐れる小心者だ。ただこの場にいる者は、普段の彼とは少し違う。というのも、今の状況下において彼が取ると思われる行動は、この状況からの回避もしくは逃避であるのに、そこにいる者はこの状況を迎え撃とうとしているのだから。しかも表情は冷たく、心にナイフのような凶器を持っている。二重瞼の下にある瞳は深い闇のような色をして、襲いかかる男たちの姿が映していた。

「をもらああ——！」

声を上げて凶器を振りかざし、フミヤへと迫る男たち。スカジャンを着た男を先頭にして、距離をどんどん縮めて行く。上から見れば“へ”の字のような隊形。その先に一点が置かれて、“べ”に成り損なつた文字のようにも見える。5人の荒くれ者は隊形を崩さずに、離れた場所にいるフミヤへと近づいていく。先頭を行く男との距離が3メートルを切った時、フミヤにも動きが起きた。

右手を左わき腹辺りに向かつて、ゆっくりと動かす。ピタッと静止する右腕。その姿は抜刀する侍のようである。見えない真剣を握りしめて、フミヤは襲いかかる男を迎えていた。

そこに飛び込んでくるスカジャンの男。かざした凶器の矛先をフミヤに向けながら、彼の懐へ突っ込んでいく。右手には風を切る凶器を持ち、左手はフミヤの喉元に向けて突き出されている。しかし、フミヤは依然静止したまま……男の動向を窺っていた。

フミヤと男との間にある距離が１メートルを切る。その時、男は地面に触れている右足で思いっきり踏み切った。

男の両足は宙を駆け、フミヤとの距離を一気に縮めていく。男の体が描く放物線の先には、冷静な態度を貫くフミヤの姿が……。飛びかかる野獣はその恐ろしい形相を更に強張らせていく。男の持つ凶器が、力を発揮できる間合いに入ったのだ。

次の瞬間、男はナイフをフミヤに向って、躊躇^{ためら}うことなく振り落とした。

気がついた時、辺りは静まり返っていた。

右腕と左腕に痺れがあり、身体は走った後のように荒く息をしている。こっちに向けられているバイクのライトは反射的に顔を反らしたくなる程眩しく、立ち尽くす私の姿だけを照らし出していた。

目の前にいた筈の男たちは、いつの間にか姿を消している。私独りがこの空間に取り残されている。

気を失っていた間に、何が起こった？

自分自身に問いかける。

一番最近の記憶は、襲いかかる男たちに対して迎え撃つ態勢を取ったところ。その時私は、《あの力》を解放していた。

得体のしれない白き力。あれは私以外の物と反発する性質を持っている。存在に気づいたあの出来事以後、私は自分なりに《あの力》について色々調べてみた。その甲斐あってゼロだった知識は、今では少しだけ増えている。

まず、あの力は人に対して無条件に働いてしまうということ。これは、今までの経験から導き出された答えである。次に、白い物体として捉える事が出来るのは私の集中力が高まった時だけということ。極度の緊張感に包まれた状況でも、見る事が可能だ。そして最後に、力は人以外にも形あるモノには働くということ。ただし、これには条件が必要となる。私はその物を触れたくないと心底思わない限り、力が働くことはない。なので、服を着る事が出来なかったり、椅子に腰かける事が出来なかったり、食べ物や口に入れる事が出来なかったり、といった事は起こらない。

そんな訳もわからない力を使おうとしていた私。その後、自分の中で“何か”が起きて……。

……………。

記憶を辿ろうとしたが、その場面で記憶はキレイさっぱり切り取られている。掘り起こしてはいけない記憶なのか、思い出そうとする頭の中を電流に似た痛みが走った。

私はこれ以上考えるのを止めて、とりあえずこの場所から立ち去る事にした。

俯く顔を上げて、光を放つ入口の方を向く。胸を張って背筋を伸

ばし、地面に対して身体を垂直に立てる。身体を動かす準備が整うと、右足をゆっくり前に出した。

トン……

右足が地面を踏みしめている。続いて、左足を一步前に。

トン……

そして、また右足を――

ううう……

何かが呻くような声が聞こえ、踏み出そうとした右足を止めた。

「ううう……」

右側から聞こえてくる呻き声。不気味な音は私の鼓膜を震わせて、“こつちを向け”と誘っている。だが、私はその正体を知る事に躊躇した。なぜか見てはいけないような気がしたから。無視してやり過ぎそうと思っただが、一度気になってしまった声をそう簡単に無視することは出来ない。私は右方向に首を回転させて、呻くモノのいる場所へと視線を移つした。

バイクの光が届かない建物の壁付近。そこで呻き声をあげる物体。見てはいけない……そう思っても、私の体は正体を探ろうとする。眼はその場所を凝視し続け、何かあるのかを捕らえようとしていた。
「……………」

――見えた。

声を上げているモノの正体が見えてしまった。

呻き声をあげる物体。それは先ほど襲いかかってきた男の一人だった。身体をくの字に曲げて、死にそうな声を上げている。うずくまっている男は身体を小刻みに震わせて、口からはドロツとした液体を零していた。

男の元に行く地面には、光の中に浮かび上がる赤い斑点が私のもとから男の方へ滴^{したた}れている。殺人現場と呼べなくもない日常から逸脱した光景は、恐怖となって私に襲いかかってきた。

最後の記憶にある私の中で起きた“何か”——それは理性によって守られてきたはずの“殺意”。平穏な生活を踏み散らかすものへの敵対心から生まれた感情。その感情によって起こされた結末が、今日の前に広がっている。

私は、人を傷つけるような真似はしない！

きつと気を失っている間に、私以外の誰かにやられたんだ！

現実から目を背ける私に、目の前に広がっている^{げんじつ}事実は容赦なく襲いかかってくる。

認めざるを得ない私の過失。無意識に起こしてしまった惨劇。それを認めてしまった時、奏 文哉という人物が急に恐ろしくなった。

1人の男が倒れている現実を受け入れると、他の4人がどうなっているのかが気になった。私は身体を少しずつ回転させながら、辺りを見渡していった。

ゆっくりと右に流れていく視界。人口の光が照らす地面を、足元の方から建物の壁際へとじっくり観察していく。

入り口とは反対側に位置する壁、その左隅に転がっている木製のバット。更にその奥へ視点に移すと、うつ伏せで倒れこんでいる人間の姿があった。その場所から右へ移動した所に同じような恰好で2人の人間が転がっている。

もう1人は……地上2メートルの所にある建物の2階で、柵に上半身をつっ込み、足を宙にブラつかせていた。

まるでアクション映画にあるような光景。普通の人間では起こせない、乱闘後の光景。それを目にした私は、顔から指先から、身体の到る所から、血の気が引いていくのを感じた。

「は……は……はは……はははは……あはははは——」
精神は崩れ出して、もう正気ではいられなくなった。

なんだよ、コレ？

本当に私がやったのか？

まるで……怪物が暴れたみたいじゃないか。
ばけもの

建物内に広がる異様な光景を私はどう捉えたらいいのかわからず、乾いた声でただ笑い続けた。悲しい笑い声はしばらくの間、建物内を響き渡った。

時間が経過して、少し落ち着きを取り戻した。だが、どうしたらいいのかわからない気持ちのワダカマリは依然として心に残っている。

る。気持ちの整理もつかない状態で、“この場所から離れたい”という意志だけが働いた。

脱力した体が、建物から外へと繋がるゲートを通り過ぎる。自分がどこに向かつて歩いているのか……それは、わからない。無意識の中で動く身体に、私はただ身を任せていた。

廃工場の中をゆらゆらと揺れながら、おぼつか覚束ない足取りで歩いていく。虚ろな瞳で見えているのは、監獄のようなこの場所を取り囲む高い壁と、そこに唯一開けられた“日常に戻るための出口”だけ。砂利道を歩いているはずなのに、聞こえてくる音は何もない。感覚が麻痺して、五感が停止しかかっている。

無気力な身体を携えた私は亀のような鈍重な歩みで、まどろみの中に浮かぶ出口へと進んでいった。

「——お兄さん、強いんだね」

ボーとしている頭の中に、誰かの声が入ってくる。

「でも、あんな風に“力”を使っちゃダメだな。だって彼ら普通の人間なんだから——」

遠のいていた意識が徐々に戻ってくる。

私に話しかけているのは……誰だ？

動き始めた脳は一つの疑問を提唱した。

「普通の人間に使うなんて、力の無駄遣い。もっと別のところで使わないとね」

抜け殻の体に力が戻ってくる。そして、動く足が止まった。

「そう思わない？——お兄さん」

後ろから話しかけてくる誰か。私は脚を残したまま、体をねじって後ろを振り向いた。そこにいたのは、建物の壁にもたれるようにして立っている一人の若者だった。

月が照らす廃工場の中で、偶然起きた不思議な出会い。

この後の運命を左右する出来事になるうとは、今の私には知る由もなかった。

4・出会い

肩まで伸びた長い髪を揺らしながら、私を見つめている若者。何もかもを見透かしてしまいそうな瞳と薄いピンク色をした唇が、ほほ笑んでいる顔を艶めかしく見せている。気品のある美しさを持つ若者は、闇の中で異様なまでに輝きを放っており、私にはそれが怖く思えた。

「お兄さん？ 僕の話聞こえてる？」

笑顔で問いかけてくる少年。高めの声質と容貌からは少女とも捉えられるが、“僕”という言葉からおそらく少年だろう。

「ああ」

「聞こえてるなら返事してくれなくちゃね。一人で話していると変な人みたいじゃないか」

「すまない……」

こんな廃墟に現れた少年を警戒しながら、私は言葉を交わした。ムツとした顔をしている少年。でもすぐに頬を緩めて、一言つぶやいた。

「お兄さん——能力者だよね？」

私の心臓を握りしめるような一言。この少年は、私に不思議な能力がある事を知っている。

凶星を指された私は、うろたえながら居心地の悪さを感じた。

「さっきの戦いで使っていたのが、そうだね？ フフフ……そんなに怖い顔をしないでよ。さっきの出来事やお兄さんの事を誰かに言うつもりはないんだから。だって、僕も同じ能力者だから」

「えっ！」

同じ能力をもっていると明かした少年。それがわかった時、彼に對して恐怖を覚えた。

——先ほど起こした悲劇が脳裏をよぎる。

背中を一筋の水滴が流れ、身体中を寒気が襲った。

「大丈夫。襲ったりなんて……しないよ」

急に低い声で、言葉をささやいてくる。私の身体は痙攣したかのようにつぶれと震えた。

私はこの少年に、今までにないほどの恐怖を感じていた。

「君は……いったい——」

「僕かい？ 僕は白馬（ハクバ）。そういうお兄さんは？」

「……かなで………奏 文哉」

「フミヤかあゝ、悪くない名前だね」

別に名前を知りたかったわけじゃない。私も教えるつもりなんてなかった。だが相手が名乗ってきたので、つい自分の正体も明かしてしまった。

「フミヤは自分の力についてどう思う？」

「力って——身体を取り巻いている白い靄のことか？」

問いかけられた質問に、頭に浮かんだ言葉で素直に返答した。

「ん？」

しかし、白馬にとっては予想外の答えだったらしい。驚いたように目を丸くしている。

「フミヤ……もしかして、見えるの？」

うなずいて答える。

「そっか、そっか、見えるんだ。フッフ……アハハハハ——」

突然笑い出す白馬に、困惑した。

何かおかしいなことも言ったのか？

私は呆気にとられて、その場に立ちすくんでいた。

しばらくして、白馬の笑い声が止んだ。笑った後だからか、顔は少しにやけている。

「ごめん、ごめん。まさか見える人がいるなんて思いもしなかったから」

見える人がいるなんて思いもしなかった？

白馬の言葉が頭の中をループする。

「普通は見えないんだけどね……。フミヤ、見える事はあまり他人には話さない方がいいよ。それはフミヤだけの力だから」

私だけの力？

「それにしても、僕はついてるなあ。まさか力が見える人間に会えるなんて」

白馬は嬉しそうな顔で私を見つめていた。

「ねえ、フミヤは空間拒絶能力って知っている？」

またしても、白馬は質問をぶつけてきた。

「くうかんきよぜ……っ……のうりよく？」

初めて耳にする言葉だ。

「そう、空間拒絶能力。僕たちの力のことだよ。まだ公にはなっていないけど、そう呼ばれているらしい。」

人間には元々自分だけの空間があって、その空間領域を上手く操作して生きているんだ。例えば、社交的な人は領域を出来るだけ狭めて、他人を受け入れようとするとするし、逆に人見知りの激しい人は領域を広げて、他人を遠ざけようとする」

私はただ白馬の言葉を頷きながら聞いていた。

「で、その空間を上手く操作できなくなってしまう場合、人は関係を保てなくなってしまう。性的に受け付けない人が出てきたりするの、それに当たるかな……。あと、名前を聞くだけで気分が悪くなったりっていうのも。まあ、一部のモノとの関係だけだね。」

僕たちは、その空間操作ができなくなってしまう上、自分以外

の全てのモノを物理的に拒絶してしまう力を持ってしまった異端児
ってところかな」

私を含めて異端児と呼ぶ白馬に、少なからずの嫌悪感を抱いた。
「だから、僕たちが持つているような他者を拒絶する見えざる力を
特別に空間拒絶能力っていうらしい。でもそれって僕たちが拒絶し
ているみたいだね、本当は逆なのに……。」

気が付いたら僕たちが世界から拒絶されていた、こっちが正しい
言い方だよ。そう思わない？ だから僕はこの力を別の名前で呼ん
でいるんだ。拒絶されている空間——the Area Is R
e f u s e d——AIR^{エア}ってね」

——拒絶されし者の空間、AIR。

確かに他者を避けて生活を続けている自分は、社会から拒絶さ
れた存在だ。納得してしまう自分を認めたくはないが、彼の言っ
ている事は正しい。

「僕は何人かAIRを持つ者を見てきたけど、彼らの生涯は悲惨な
ものさ。社会に溶け込むことができず、生活するためのお金も底を
つき、最終的にたどる道は死か犯罪かのどちらかなんだから」
さも私の運命が決まっているような言い方だ。

白馬は何を言おうとしているのか？

「僕はそんな能力者達に救いの手を差し伸べているんだ。フミヤも
お金ないんだろ？」

「いや……別に……」

“そんな事はない” そう言おうとしたが、声に出すことはできな
かった。今は生活できているが、いつかはお金が底をついてしまう
事には変わりはない。お金に困っていない、なんてハッキリ断言する
事はできなかった。

「フフフ……。どうやらフミヤも困っているみたいだね」

白馬が何を喜んでいるのかわからない。私は白馬が次に口にする言葉をただ待った。

「ねえ、フミヤ。ゲームに参加しない？」

「ゲーム？」

「そう、ゲーム。賞金を懸けた、AIRを持つ者だけのゲームさ」いきなりの提案に私は戸惑った。そんな私を無視して、白馬は更に話を進めていく。

「参加するだけで10万、一つ勝ち上がるとに賞金が出て、優勝すれば1000万が貰えるトーナメント形式のゲーム。ゲーム内容は始まるまでのお楽しみ————どうか？ 魅力的だと思わないかい？」

白馬から持ちかけられた話は、虫のよすぎる話だった。普通なら飛びつきそうな話だが、私の頭は話の内容を冷静に分析していた。

参加するだけで10万？ 優勝すると更に1000万！？

いったいどこからそんな大金が出てくるのか……。

それよりも能力者を集めてゲームだなんて何を考えている？
ゲームって何をするんだ？

冷静に分析した後で私は返事を返した。

「……確かに魅力的な話だが、私は遠慮させてもらっ」

「どうして？」

「あまりにもウマすぎる話だからだ。ゲームの詳細だつてわかっていないのに参加するかどうかなんて決められないし、何処の誰かもわからない連中とゲームに参加することも気が引ける。それに……争うのは、好きじゃない」

自分の思いをすべて吐き出した。

「なるほど。まあ、危険がないとは言いきれないね。そっか、そっか……」

残念そうにうつむく白馬。どうやら無理やり参加させるつもりはないようだ。

「フミヤがそういうなら仕方ない。もしかしたら、この力を克服することができるかもしれないのに……残念だよ」

「——えっ！」

私の意思を揺らがせるような言葉が白馬の口から出てきた。

「あれ？　もしかしてフミヤにとってはこっちの話の方が魅力的だったかな？」

さっきまで浮かない顔をしていた白馬が、急に笑顔を取り戻す。

「力を克服——って、どういう意味だ？」

「どういって、そのままさ。普通の人間のように生活できるかもしれないって事」

普通の暮らしに戻れるのか？

私の中で、不確かな希望が光を放ちだした。

「白馬、それってつまり——」

「あゝあ、そんなに慌てなくてもいいよ。ちゃんと説明してあげるから」

どんな音も聞き逃さないように、意識を耳に集中させた。

「過去に行われたゲームの中で、AIRを自由にコントロールできる者が現れたんだ。自分の意思によって拒絶する事も、受け入れる事もできる、まさに理想の能力者。どうやって克服したのかはわかってないけど、ゲームに参加したことで力を制御できるようになったのは事実だよ」

「それで……その人は今普通の生活に戻っているのか？」

「いや、ゲーム後の彼の行動については把握してないからわからないよ……。僕が関与するのはゲームの事だけだからね。後の事までは知らない」

そこで会話は止まった。

参加するべきなのか？

いや、そんな怪しい話には乗るべきではないのか？

二択の選択肢に振り回されている私。それは黙って眺めている白馬。

私と白馬の間に、初めて沈黙が生まれた。

3分が経過しようとき、閉ざしていた口を白馬が開いた。

「まあフミヤは意外と用心深そうだから、今すぐ決断しなくても構わないよ。そうだ、コレ」

そういつて白馬は一枚の紙切れを私に向かって投げた。

「そこに僕の電話番号が書かれているから、参加する気になったら電話をかけてくれたらいい」

地面に落ちている紙切れを拾い上げて広げると、確かに電話番号らしき数字の列が並んでいた。

「ゲームの詳細は教えられないけど、いい返事が来るのを待ってる。きっとフミヤなら参加してくれると期待しているよ」

そういつて微笑みを浮かべたまま、白馬は工場の奥へと消えていった。

彼が去ったこの場所が、以前の薄気味悪い工場へと戻っていく。

残された私は、手に持った紙切れを眺めながらゲームへ参加すべきかどうか思案し続けていた。

5・悪夢

目の前を覆うように、男の体が私の視界いっぱい広がっている。手にはナイフを持っていて、私に向かって振り落としている。

——状況は最悪。

でも、心のどこかでこの状況を待ち望んでいたかのように、私は気持ちを高ぶらせていた。

押し寄せる男の狂気。それを目の当たりにして、ニヤリと笑う私。武器となる物を持っていないのにもかかわらず、心には余裕がある。迫りくるナイフを玩具だと勘違いしているのか、恐怖感はない。私は男との距離を慎重に見計らって、右腕に力を込めた。左下腹部で待機していた右手が、相手の胸へと打ち出される。刀を抜くように振り上げられる右腕。右手は男の体に触れる事なく、私の右斜め上へ——

襲いかかってきた男は、私の右手が起こした行動により、建物の右側へと吹き飛ばされる。口から赤い液体を零し、トラックに激突したかのごとく一瞬にして吹き飛んで行く。重力を無視したように宙を舞いながら、飛ばされた男はそのまま建物の壁に激突した。

——視点を吹き飛んだ男から、男が吹き飛ぶ前の位置に戻る。

4つの人影が前方から駆けてくる事を確認。私は4つの中で、一番手前にいる者を次の標的として選んだ。

右腕を振り上げた勢いのまま、肩の可動により背中側を通して、下へと振り落としていく。

体を屈めて次の攻撃の態勢へ——

前から鉄パイプを振りかざした男が突っ込んでくる。

タイミングを見計らって、折り曲げていた膝を伸ばす。同時に右の拳を男の腹部に向かって突き上げた。

拳は男の身体を持ち上げて、そのまま私の頭上まで止まることなく進んだ。私の遙か上空を舞う男は、腰を起点として身体をプロペラのように回転させていた。

拳を打ち出す一連の動作により、身体が瞬間利なくなる。その隙をついて、一番右端の死角にいた男がバットを振り落としてきた。振り落とされる直前に気づいた私。全身に力を入れ、バットの衝撃に備えた。

振り落とされるバット。バキツという音を立て、直線の胴体を歪ませる。

——私の体に負傷はない。

男は困惑と焦りが入り混じったような表情で、こっちを見ていた。

私は困惑している男に向かって、頭上で停止していた右拳を打ち込んだ。

拳の裏側が男の胸へ——

右わき腹に拳を受けた男は、身体をくの字に曲げていく。腕の軌道に乗った男は、私の右後ろへと姿を消していった……。

——残った敵は2人。私の左側から迫ってきている。

今の私は、右腕を横へ伸ばし左腕を胸の前に持ってきていて、まるで仮面ライダーの変身シーンのような態勢。襲いかかる敵に対する次の行動は……。

状況を整理した私は、左腕で迫りくる男たちを振り払った。

「これで終わり——」

私の口からこぼれた言葉。その言葉通りに男たちとの戦いは終戦を迎えた。

立っているのは私一人だけ。他の者は皆倒れ、苦しみに満ちた呻

き声を上げている。

周りに散らばった赤き液体。そこを照らすバイクのライト。照らされたステージの中心には、私が満面の笑みを浮かべて笑っていた。

私は恐ろしい夢を見た。鳥肌がたつほど恐ろしい夢で、現実味のある夢だった。

夢の中で私は男たちに襲われていた。

襲いかかる男たちを容赦なく、次々に倒していく私。敵を虫けらのように葬り去る時、胸の中がスツとして、ストレスが解消されていく感じがした。

無敵の強さを持つ私は、傷一つなく戦いを終わらせた。

戦いの後――

気分が良くなったのか、私は惨劇の舞台で一人笑っていた。傷ついた者たちを見て笑っていた。

そこにいる私は、まるで人間の仮面を被った悪魔のようだった。

夢から覚めても、私の手にはまだ男たちを葬った時の感触が残っていた。悪魔のように笑っている姿は、今も頭の中に焼き付いて離れない。

「ハア……ハア……ハア……」

大きく息を吐き出しながら、気持ちを静めていく。額を流れている汗が室内の空気に触れて、頭を冷やす。汗で濡れた寝巻きが体にべた付いて、少しでも動くと気持ち悪さを感じる。私は布団の中で

じつと動かず、刻々と時間が過ぎていくのを感じていた。

しばらくして、私は落ち着きを取り戻した。

「なんだよ……あの夢は」

まるであの出来事を回想しているかのような夢。襲いかかる男たち、私の立たされていた状況、惨劇後の光景、すべてがあの出来事とリンクする。

私の記憶から抜け落ちた部分があのだとしたら……。

恐ろしい程黒いモノが胸に込み上げてくる。

悪魔だと思ったモノは、もしかすると私自身なのか？

反芻する考えに応えるよう声が聞こえてきた。

『そうだよ。あれは君だ』

私は聞こえてきた声を振り払うように頭を振った。

（いや、違う。そんな事あるわけない）

『自分を誤魔化しても無駄さ。現に君はあいつ等を殺ったじゃないか』

（私じゃない）

『そんなに自分を善人に仕立て上げたいのかい？ 無理をするな。偽ろうとするな』

（偽ろうなんてしていない。私があんな事するわけがないんだ）

『君が知らないだけさ。いくら知らぬ顔をしても、君には昔から悪魔が住み着いているんだから——』

（おまえが殺ったんだろ。それを私のせいにして……）

『違うね。俺は何もしちゃいない。すべて君が起こしたことだ』

（いや、私じゃない。おまえが起こしたんだ）

『往生際が悪いんだね。まあ俺が殺ったと考えてもいいよ。けど、それって君が殺った事と同じだよ』

（おまえと私は同じじゃない）

『へえ、俺と君は違うというのかい？ おかしな事を考えるんだね』

（何がおかしいんだ？）

『だって俺は君に作られた存在、もうひとりの君なんだから』

——声が止む。

私の中に住み着く黒い存在は、その後話しかけてくる事はなかった。

静けさに包まれた部屋。暗い闇の中で呼吸を繰り返す私。周りは黒一色の世界で、自分もその世界と同化している。闇に染まった姿

が、もう一人の私の姿を思い出させる。布団から抜け出せない私は、自分自身を恐れて小刻みに震える体を必死に抑えた。

あれは私では……ない。

思いは誰に届くわけでもなく、虚しく闇の中に消えていった。

6・犯罪者

鳥のさえずりが聞こえてくる。窓からは光が差し込んでくる。時計の文字盤は7をさし示し、一日の始まりを知らせていた。

私は抜け殻の身体を布団で包み、意識を朦朧とさせている。あの夢を見てから一睡もできず、今の状態が続いていた。自分の力・夢の出来事、その両方を考えるだけ心の中は掻きむしられ、自分を恐れる度に闇が私を染めていく。否定する意思も徐々に力を失い、何が何だかわからず、いつしか自分を見失っていた。

『君には悪魔が住み着いている』

あいつが言った言葉。私はその言葉を否定も肯定もせず、考えることに疲れ果てて、今ではどちらでも良くなってきていた。

ピッ

黒のブラウン管に鮮やかな映像が映し出される。ブラウン管内では、スーツに身を包んだ男が昨日の出来事について解説をしていた。私の右手に握られたリモコン——意図してつかんだわけではない。電源を押す右手の親指——テレビを見たくて押したわけではない。すべて無意識のうちに起こされた行動。毎日の習慣がそうさせたのだ。

午前7時、ニュースを見る。いつもは運動不足解消のために行っているランニングの後、息を整えながら見ている。そして、ニュースを見ながら朝食を食べるのが私の日常である。

——身体にしみ込んだ毎日の習慣。こんな状況でもその習慣は息

づいているらしい。

私は茫然としながらも、流れる映像に目を向けていた。

流れる映像を見てみると、朦朧とした意識が少しずつ晴れていく。テレビを見るという行動が、自分の陥っている状況を一時的に忘れさせてくれる。

今は飛び込んでくる情報だけを頭の中で処理していた。

『次のニュースです』

画面に映る男は、硬い表情を崩さずにピシッとした姿勢を貫いている。面白みのない映像だが、変化の起こらない絵だからこそ、こうして見続ける事ができるのかもしれない。影のかかった部屋の中に、バラエティー要素の入った映像は刺激が強すぎるだろうし……。私はただ黙々とニュースを眺め続けていた。

このニュースが流れるまでは――

『続いてのニュースは、本日午前4時に起こった事件です。××県××市のある工場内で、倒れている5人の男性が発見されました。倒れていた男性らはいずれも身体を強く打っており、現在市内の病院で治療を受けています。5人とも意識不明の重体だそうです。警察の調べでは、男性5人が事件前にある男と接触していたという証言から、その男との間に何らかのトラブルがあったと見て、男の行方を捜索中です――』

テレビの中で告げられた現実。忘れかけていたモノが私の中へ一気に戻ってきた。

『君には悪魔が住み着いている』

その真意については結論を出さないでいた。そんな私に突き付けられた答え。

——犯罪者。

もはや自分の意見は関係ない。社会は私を犯罪者として迎え入れてしまった。私の中で何かが変わっていく気がした。

テレビを消すと、部屋にまた静寂が戻ってきた。

薄暗い雰囲気の中、私はゆっくりと腰を上げた。重い足取りで窓際へと歩いて行き、光を遮っているカーテンから少しだけ顔を出す。カーテンの隙間から私は外の様子をうかがった。

町ではいつもと変わらない生活が始まっている。道路には畑へと繰り出す老人が2、3人いるだけ。畑も相変わらず質素な色をしている。事件があったとは思えないほど、のどかな光景。変わってしまったのはココだけだった。

大きく息を一つ吐き出す。

「この街に私の居ていい場所は無くなった……」

口から出た言葉。それは私の本心である。

『最終的にたどる道は死か犯罪かのどちらかなんだから』

白馬が言った言葉はその通りだった。

私は罪を犯した。しかも私の中には未だに悪魔が潜んでいる。私が望まなくても、悲劇は繰り返される。私に制御する力があるとは思えない……。

外を眺めながら、両手をポケットに突っ込んだ。この姿勢は私の癖のようなもので、何かを考えるととき無意識に両手をポケットへ入れてしまうのだ。これから自分はどうすればいいのか考えようとしたとき、ポケットに入れた右手に何かが当たった。

「ん？」

ポケットの中に何かが入っている。

ポケットからそれを取り出してみると、右手に握られているのは一枚の紙キレだった。紙の上には11個の数字が並んでいる。

私はその紙をじっと見つめて、しばらくその場で立ち尽くしていた。

気がつくと、私はこの部屋のどこかにある携帯電話を探していた。携帯電話を見つけた私は、右手に電話を左手に紙を持ち、書かれた数字を一つ一つ確かめながら数字の書いてあるボタンを押していた。私の行動は、意識の下で行われているモノではなく、身体が勝手におこなっているモノ。

電話から発せられる呼び出し音。

この電話の先に何があるのかはわからない。だけど私は、電話の向こう側に微かな希望を抱いていた。暗い部屋の中で、私はその音が止むのをじっと待っていた。

7・決断

太陽が山の向こう側へと姿を消していき、空が淡い赤色に染まる。夜を迎えるために世界が準備を行っている。そんな世界の中で、私は慎重に足場を確保しながら、終わりの見えない石階を上っていた。コケを生やした石段は自然がもたらす再生の力により、石の隙間から草を伸ばし、端から縁に押し寄せられて、人が破壊してしまつた本来有るべき姿を取り戻そうとしていた。小さな穴から顔を出す雑草は、私に踏まれても挫けることなく、天に向かって羽を伸ばす。衣を失つた大木は、寒気の中で肌をさらし泣き声を轟かせながらも、その場でじつと固まつたまま身体を震わせることなく立ち続けていた。華やかさを失つた森であるが、そこに息づく生命は力強く堂々としていて、自分の存在を主張していた。

階段を歩き続けて約1時間。ようやく終わりが見えてきた。
あらてやま

荒手山の中腹に位置し、自然の中にその身を置いても決して引けを取っていない建物。大きな鳥居を構えていて、そこに住む者の威厳を誇張している。長い年月により作り出された姿がまた古い歴史を感じさせて、偉大な存在であることを訴えていた。

——昔からこの地を守り続けている荒手山神社。

私は鳥居をくぐりぬけて、神社の境内へと足を踏み入れた。

石畳の通路を歩き、神殿の前で足を止める。ゆっくり顔を上げて、前にそびえる神殿に目を向けた。

赤から黒へと染まっていくな空を背負つて、大きな影を落とす古い建物。愚かな人間を目の前にしても、ただ黙って立ち続けている。寛大な神は、人の道から逸れてしまった私をもやさしく包んでくれている——そんな気分になさしてくれる。

私は両手を合わせて、少しだけ頭を下げる。ゆっくり瞼を落とし

ていき、心の中で言葉を交わした。

私に起こる災害を……どうか静めてください。

静かに過ぎゆく時間の中で、私は何度も願いを伝えた。

「そんな所で何してるんだい？」

私は目を開けて、振りかえった。

「やあ、フミヤ」

手を上げて挨拶してくる少年。鳥居の柱に体を預けて、いかにも“待っていました”と言わんばかりのポーズをとっている。

「6時の待ち合わせだったのに、5分前に来るなんて……感心、感心。さすがフミヤ、いい大人の手本だね」

少年は微笑みを浮かべて、白い歯をちらりと見せた。

見た目で人を判断するのは良くない事だが、少年は私よりだいぶ年下だろう。予想では十代後半に差し掛かったくらい。そんな子供に褒められても、あまり嬉しくはなかった。

「また会えるとは思ってなかったから嬉しいよ」

少年は本当に嬉しそうな顔をしていた。

「白馬、嘘をつくな。私が君に会いに来る事は、予想できていた事なんだろう？」

「そんな事はないよ。僕は占い師じゃないんだから、人の行動を予測したりなんてできない。フミヤから電話が掛ってくることやここでフミヤと会う事も、すべて予想していたことじゃない」

「そうとは思えないが——」

「本当さ。まあ、そうなければいいな——なんて思っただけだね」
白馬の言葉に迷いはなかった。

「それで話があるって言うていたけど、どんな話なんだい？」

白馬は頬を緩めたまま、話の核心に触れてきた。

「ああ……そうだった。話というのは、言うまでもなくゲームの事

だ」

私は躊躇する事なく、返事を返した。

「……だが、その前に一つ聞いておきたい事がある。警察に通報したのは君か？」

真剣な口調で白馬に問いかける。

「そうだよ。でも、それがどうしたんだい？　もしかして呼ばない方が良かったのかな？」

「いや、そういうわけではないんだが……。ただ、どうして警察を呼んだのか知りたくて——」

「もしかして、事を大げさにしてフミヤを追いつめようとしたんじゃないかって考えてるのかい？」

「……」

「そんな事考えてないから、怖い顔をしないでくれよ。僕が警察を呼んだのは、フミヤを人殺しになんてしたくなかったから……それだけ」

「なんで私を人殺しにしなくなかったんだ？」

「不思議な事を聞くんだね。人殺しになってよかったのかい？」

私は無言で首を振った。

「だよ。まあ何で人殺しにしなくなかったかというと——特に理由はない。強いて言えば、フミヤを気に入ったから、かな？」

白馬は表情を変えず、私の質問に答えた。

「……わかった。変な事を聞いて済まない……」

「別にいいよ。疑われたままでいられたら気分良くないし」

こっちが呆気にとられるくらい、白馬は私に疑われていた事を気にしてなかった。

「——で、話を戻そうか。ゲームについてだったよね？」

「……ああ」

「フミヤ、君の考えを聞かせてほしい」

白馬の顔から笑みが消えた。

「この前……といっても今日の話だが、ゲームに参加してほしいと

君は言ったよな。あの時は色々な事があり過ぎて頭の整理が付けられず、はつきり答える事ができなかった。家に戻って、ゆっくり……真剣に考えてみた。そして、答えを出した——」

この場を流れる時間が、一瞬だけ動きを止めた。

「私は……」

真つすぐ白馬の眼を見て、私は気持ちを言葉にした。

「ゲームに……参加する」

白馬はじつと見ている。私の心を探っている。そんな白馬に対して、私も表情を崩さない。視線を跳ね返すように全身に力を入れた。緊迫した雰囲気の中、白馬の目じりが少しだけ下がった。一回まばたきをした後で、閉ざしていた口をゆっくり開いた。

「——君を100人目の参加者として歓迎するよ」

時間が再び動き始めた。

私は強張った表情を緩めて、大きく息を吐き出した。

「それで……これからどうすればいい？」

「しばらくは家で大人しくしていればいいよ。後日ゲームについて連絡するから」

「わかった」

「それじゃあ、今日はこれで——」

白馬は鳥居をくぐると、石段の下へ姿を消していった。

一人になった私は、天を見上げて言葉を零した。

「これで……よかったんだよな？」

黒く染まりゆく空の端から、小さな光が生まれ始めた。通り過ぎる風が鳴き声を上げ、落ち葉を夜空へと舞い上げる。

私の声も空に届くだろうか？

家に戻った私は、腹の虫を鳴かせていた。丸一日餌を与えていない身体は、今や余力すら残していない。布団の上に横たわり、疲れた体を休める。

天井を見つめていると、今日の出来事が一気に頭を駆け抜けた。

——すべての始まりは、あの不良達と出会ってしまった事にある。不良達は私を認識すると、殺気立った身体で追いかけてきた。私は逃げて……逃げて……逃げて……、追ってくる不良から逃げ続けた。だけど、逃げる中で考えを変えた。逃げる事を止めて、不良と戦う事を決心した。

……戦った後、私に残ったモノは自身に対する恐怖だった。恐怖から逃げようとした私の前に、更なる出来事が待ち受けていた。白馬という少年との出会いだ。彼は私に害を及ぼすような事はせず、ただ希望を授けてくれた。

家に戻った私は、罪の意識に蝕まれた。暗闇で変わりゆく自分に耐えきれず、私は淡い希望の光に手を伸ばしてしまった。

逃走から……闘争。

恐れから……懼れ。

惨禍から……参加。

これほど長く感じられた一日は今までになかった。

布団に転がっている身体から力が抜けおちていく。ようやくこの世界から抜け出せそうだ。

私は頭をからっぽにして、体の機能を停止させた。

2008年12月10日。長い一日がようやく終わりを迎えた。

——第一章 逃避行の果て（完）——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866c/>

エア・バトル

2010年10月10日08時03分発行